

# 農工通信

NO.

98

2020.1

The Graduates' Association of Tokyo University of Agriculture and Technology



一般社団法人

東京農工大学同窓会

<http://www.tuat-dousoukai.org/>

TAT

# 農工通信 NO.98

## 目次

### 特別企画

母校の誇り  
“農工大の偉人たち”

堀 禄助第四代同窓会会長の業績を顧みて

深水 智明 織工 S38 ..... 1

追悼文 梶井功先生を偲ぶ

淵野雄二郎 農学院S46 ..... 2

### 誇 【I】 令和で輝くプロの誇り

- |                                    |       |         |       |   |
|------------------------------------|-------|---------|-------|---|
| 1. 私のささやかな果樹育種人生                   | 芦川孝三郎 | 農乙 S23  | ..... | 3 |
| 2. 果樹の研究生活・恩師・最近のこと                | 小池 洋男 | 農学 S42  | ..... | 4 |
| 3. The Fucoidan                    | 玉城 武  | 農化 S43  | ..... | 4 |
| 4. 新たな時代の森林経営管理                    | 眞坂 京子 | 林学 S58  | ..... | 5 |
| 5. 鳥獣による農業被害対策で必要なこと               | 藤井 猛  | 環・資院H10 | ..... | 6 |
| 6. 実学と教養                           | 森田 成昭 | 生シ博H13  | ..... | 6 |
| 7. 母校での再びの研究生活で感じたことと<br>学生の皆様への期待 | 乃万 暢賢 | 機シス博H27 | ..... | 7 |

### 魅 【II】 魅力ある悔いなき仕事人生

- |                     |       |        |       |    |
|---------------------|-------|--------|-------|----|
| 1. 野生動物との半世紀        | 赤坂 猛  | 林学院S49 | ..... | 9  |
| 2. アルコール研究と不時着人生    | 長谷場 健 | 農化 S49 | ..... | 9  |
| 3. 一万キロに及ぶ転勤の旅      | 木下 喜博 | 林学 S55 | ..... | 10 |
| 4. 農林業で飯を食う         | 榎本 敬  | 林学 S62 | ..... | 11 |
| 5. オトナの都市・農村の交流のススメ | 滝沢 将史 | 生産院H11 | ..... | 12 |

### 懐 【III】 懐かしき青春時代を顧みて

- |                          |       |        |       |    |
|--------------------------|-------|--------|-------|----|
| 1. 東京高等農林学校の思い出          | 島 俊雄  | 林学 S16 | ..... | 15 |
| 2. 剣道部創世記                | 小室 敬  | 織化 S31 | ..... | 15 |
| 3. 若き日の日高敏隆先生の想いで        | 織田 聰  | 獣医 S40 | ..... | 16 |
| 4. 真に人生の基盤と豊かさを身につけた学生時代 | 堀 俊一  | 養蚕 S47 | ..... | 17 |
| 5. 偉大なる大地・母校 知徳体の鍛錬      | 安威 誠  | 環保 S52 | ..... | 18 |
| 6. 樗寮の思い出                | 天井 滋則 | 林産 S60 | ..... | 19 |
| 7. 農工大を卒業して30年、いま思い返すこと  | 藤掛 雅洋 | 林学 S62 | ..... | 20 |

### 永 【IV】 海外交流 深くいつまでも

- |                          |                            |        |       |    |
|--------------------------|----------------------------|--------|-------|----|
| 1. 中高年のチャレンジャー中国・大連に遊学して | 羽田 有輝                      | 製糸院S45 | ..... | 22 |
| 2. カントー大学（ベトナム）強化事業に関して  | 安藤 哲                       | 植防 S47 | ..... | 23 |
| 3. 韓国との獣医学術交流を始める        | 天野 弘                       | 獣医 S53 | ..... | 24 |
| 4. Essay                 | Kenford Luweya Aeron Banda |        | ..... | 24 |
- 国際環境農学専攻

### 充 【V】 楽しいひと時 確かな感動

- |                               |       |        |       |    |
|-------------------------------|-------|--------|-------|----|
| 1. 単独の高齢身障者の<br>日本百名山・日本百高山踏破 | 眞木 太一 | 農学 S41 | ..... | 26 |
| 2. 能楽三昧                       | 田中 賢一 | 工化院S45 | ..... | 27 |
| 3. 「信友」と八洲秀章の生地をたずねて          | 長谷川周一 | 農工 S46 | ..... | 27 |



4. 最近、感動したこと	西村 寿	農工	S50	.....	28
5. 今日からはセカンドライフ1年生	上坂 修一	林産	S54	.....	29
6. 『猟師の肉は腐らない』を読みながら	須川 均	林学	S58	.....	30

### 輪 [VI] 広がる同窓生の“和”と“輪”

1. 東京農工大学 準硬式野球部 創部63年祝賀会	宮城 清	製糸	S33	MOT H19	.....	31
2. 新しい年を迎えて	馬場 信行	林学	S35	.....	31	
3. 「なでしこ会・駒場会」活動報告	佐藤 政俊	林学	S42	.....	32	
4. 資格をふり返って	鈴木 輝征	林学	S42	.....	33	
5. 卒業50年後のクラスなかま	佐藤 俊彦	織工	S43	.....	34	
6. 記念誌『色の黒い奴』と 畜産学研究室OB会の活動	青木 隆夫	農学	S51	.....	35	
7. 運命を変えた同窓会	柳田 正	電情院	H10	.....	36	

### コラム <復興への想いひしひしと>

1. 生家・原子力発電所と地震	星野 浩一	農工	S42	.....	14
2. 福島県から大分県へ、 “同窓”に支えられた我が人生	松久 房義	蚕糸	S50	.....	21
3. あれから9年 被災地は今	鈴木 正彦	林学	S57	.....	25

### キャンパス便り <農工大の今>

第5回 「旅と鉄道研究会」	学生サークル 向友会	.....	8
「ジャグリングサークル@jug」	学生サークル 向友会	.....	13

広告	.....	37
事務局からのお知らせ	.....	38
事務局だより	.....	39

各原稿は、2019年に寄稿されました。

表紙絵のことば：池田 誠（化工S51）

〔真（緑に囲まれた池）〕

2015年の私の作品で、八王子の長池公園内の印象的な池の風景を油絵に描きました。新緑の木々に囲まれ豊かな水をたたえる池の水面の映えに心を惹かれた為です。高校時代の恩師に、この絵の題には「真」が良いとの助言を頂き題をそれに決めました。今回、農工通信の表紙にこの作品を掲載頂きとても光栄です。尚、農工大同窓会HP掲載の私の他の作品もご高覧頂ければ幸いです。

表紙の題字：沢野 勉（農化S32）

### 学科・専攻略記表

略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名	略記	学科・専攻名
農学	農学科	林学	林学科	林学院	林学専攻
農乙	農学科（乙）	農工	農業生産工学科	環・資院	環境・資源学専攻
養蚕	養蚕学科	獣医	獣医学科	製糸院	製糸学専攻
蚕糸	蚕糸生物学科	製糸	製糸学科	工化院	工業化学専攻
植防	植物防疫学科	織工	繊維工学科	電情院	電子情報工学専攻
農化	農芸化学科	織化	繊維化学科	MOT	技術リスクマネジメント専攻
林産	林産学科	農学院	農学専攻	生シ博	生物システム応用科学専攻博
環保	環境保護学科	生産院	生物生産学専攻	機シス博	機械システム工学専攻博

(\*注：寄稿者分のみ掲載)

\*学部は学科名、修士及び博士課程前期は専攻、博士課程後期は専攻博で表示。

\*98号より農学科、林学科の略記表に「学」を入れることとなりました。

# 特別企画 「母校の誇り “農工大の偉人たち”」

&lt;シリーズ第4回&gt;

これまで多くの偉人を輩出してきた東京農工大学の歴史の中で、今回は企業人であると同時に母校の発展に大きな足跡を残された方をご紹介します。

## 堀 禄助第四代同窓会会長の業績を顧みて

深水 智明 (織工S38)



堀録助氏銅像

堀 禄助氏は、繊維一筋に戦前、戦後の苦難を乗り越え、自らの信念のもと衣料に革新をもたらし、事業の成功をおさめられ、また東京農工大学同窓会第四代会長として昭和49年11

月から平成5年5月までのおよそ19年間の長きにわたり、同窓会運営の改革、発展に多大な貢献をされました。

その間、堀会長は、同窓会の組織、経済基盤の強化のために、終身会員制等の導入、大学と同窓会とのコミュニケーションの強化、財団法人東京農工大学後援会（後の教育・研究財団）の設立による大学の研究助成、教育援助への重要な貢献、また全学博士課程設置のために堀会長ご自身が後援会に多額の醸金を含め、博士課程設置への尽力等々紙面に書き尽くせない程の貢献を賜りました。

堀 禄助氏（明治41年／1908年に相模原市で誕生）は神奈川県立工業学校（機械科）を卒業後、一時期、尋常学校（現、小学校）教師を経て東京高等蚕糸学校（現、東京農工大学工学部）に昭和6年入学されました。農村の小学校教師時代に桑やカイコに触れ、生糸産業に関心を持ち、それが東京高等蚕糸学校進学の際機になり、将来の繊維事業の芽になったようです。堀 禄助氏は東京高等蚕糸学校では成績優秀で、かつ“基礎学問は絶対に重要”との信念を持たれていました。

東京高等蚕糸学校を卒業し、片倉製糸(株)（当時、片倉製糸(株)は日本有数の企業）に入社され、生糸の研究に取り組みました。一方、会社の事業にも

関心を持ち、生糸（素材）の研究のみならず、二次製品（用途）の研究を社長等に進言されました。二次製品開発のために生糸の売り先（市場）のアメリカでの生糸のマーケティングの必要性を訴えられました。

戦後、片倉工業(株)（社名変更）を引き継ぎ、厚木編織(株)として撚糸、メリヤス肌着、靴下等の製造、販売事業を始めると共に、懸案の研究であった二次製品としての衣料（特に婦人用）の研究・開発に取り組みされました。そのために生糸や細いナイロン糸を編むことができる編組機械の改良開発やシームレスストッキング等の開発を進められました。婦人用シームレスストッキングは当初、市場に受け入れられませんでした。アメリカ等外国市場調査によって、自信を持って事業に取り組み、成功を収められました。その後、社名を厚木ナイロン工業(株)に変更されました（現在は、アツギ(株)）。

シームレスストッキング等は当初、輸出から始めて国内にも普及して一大ヒット商品に育て上げ、会社を拡大し、経営基盤を安定化して上場を果たされ、日本のアパレルメーカーの先駆けになりました。堀 禄助氏はその生い立ちや片倉製糸(株)の入社時の逸話や社内での様々な動向等から非常に我意強く、ご自分の信じた道を通す方であり、振幅の大きい人生を歩まれた方で、時代も時代ですが、波乱万丈の人生を送られた方と思われます。

そして、日本中小企業団体連盟副会長等々の要職の重責を果たされ、藍綬褒章（昭和45年）、そして、昭和55年に勲三等旭日中綬章を受章されました。大変残念ながら、平成5年、84歳で永眠されました。永眠される直前まで同窓会長を務められました。

（参考資料）

「わが風雲録」（日本工業新聞社刊1964年）  
東京農工大学同窓会50年史



追悼

## 梶井功先生を偲ぶ

淵野 雄二郎（農学院S46）

本学元学長、同窓会名誉顧問の梶井功先生は、平成から令和へ元号が変わった5月頃から体調を崩され7月2日未明、ご家族に見守られながら92歳の生涯を終えられました。

先生は、昭和27年4月東京大学農学部助手として研究活動をスタート、鹿児島大学を経て、昭和46年7月東京農工大学に教授として着任され、平成2年3月に定年退職を迎えられました。その後、平成7年5月から平成13年3月まで学長に就任され、長きにわたり、本学の教育研究・管理運営の充実・発展に尽力されました。その功績の一つは、本学として、長年の懸案であった農水産系連合大学院構想の実現でした。準備段階からリーダーシップを発揮されました。学長に就任されてからは本学の管理業務に力を注ぐとともに、国立大学協会第四常置委員会委員長として大学教職員の待遇改善に尽力され、また文部科学省の「国立大学等の独立行政法人化に関する調査検討会議」の「人事制度委員会」主査として、法人移行に伴う教職員の地位保全と処遇の適正な扱いのために重要な役割を果たされました。

先生は多忙な大学業務のかたわら、常に日本農業の現実を直視し、多岐にわたる課題についての実証的、制度的研究を精力的に進め、多くの著書や論文でその成果を公表されました。

この一連の業績は還暦を迎えられた昭和61年に『梶井功著作集』全七巻として刊行されました。この刊行は学恩を受けた同窓生が先生の研究業績をとりまとめ還暦のお祝いとして小冊子にして先生に献上しようということが発端でした。先生の研究年表を作成し、多方面にわたる論稿を7つのジャンルに分類し、解題に挑戦し、先生の論稿の研究史的位置付け、現代的意義を学ぶ合宿研究会を7回開催しました。この取り組みは同窓生にとって、梶井理論の真髄にふれ、農村調査手法

やデータ分析手法等を学ぶ良い機会になりました。この著作集を通読して、北大の大田原高昭先生は「1970年代～80年代にかけての農業経済



学の動向について、後世の史家は“梶井時代”と呼ぶかもしれない」（『農業経済研究』61巻第2号）と評されました。この時期は、まさに戦後農政の転換期で、基本法農政の功罪が問われ、農地改革で創設された自作農的土地所有に基礎を置く日本農業のゆくえが農政課題になっていました。さらに、平成9年に刊行された「国際化農政期の農業問題」はWTO時代を迎え、本格的な国際化農政の下で呻吟する日本農業の打開の方向をどこに求めるかを論じ、新時代の「食料・農業・農村基本法」を視野に入れた政策論文集として、多くの農業・農学関係者から高い評価を受けました。この著書と先に刊行した『梶井功著作集』を対象として、先生が半世紀にわたり精力的に取り組んできた「農業生産力構造と農業政策の総合的体系的研究」に対して、平成11年4月に「日本農学賞」が授与されました。

その後も、晩年まで旺盛な調査研究を続けられ、多数の著書を刊行され、わが国の食料・農業政策について現場を重視した発言、提言を行い、生涯現役を貫かれました。

ここに、先生の学恩をうけ、長きにわたりご指導ご鞭撻を賜った一人として、深い感謝の意を捧げるとともに、心からご冥福をお祈りいたします。

# 誇

## 【I】令和で輝くプロの誇り

### 1. 私のささやかな果樹育種人生

芦川 孝三郎 (農乙 S23)

私は、母校を1948年に卒業し、附属農場に3年間勤務しました。その後、1951年に東京都農業試験場（現東京都農林総合研究センター）に移り、定年退職するまでの35年間、一度も異動せずに果樹育種の研究生活を続けることができました。私以外にこのような例は無く、誠に幸運でした。

研究を始めるにあたって、まず各地の研究所や篤農家を訪ねて、勉強させて頂きました。最初に静岡県伊豆山の大井上理農学研究所を訪ねました。所長の大井上康氏は、栄養周期説という異端の学説を唱えた大学者です。彼は当時珍しかった染色体が4倍のブドウ「石原早生」と「センチアル」を交配し、「巨峰」を1942年に育成しました。「巨峰」は巨大粒で注目されましたが、粒付きの悪い欠点がありました。この点を改良する目的で私は「巨峰」の実生120本ほどを養成し、その中から色々な形質を調べて、有望な10系統を選抜し、結実させてみました。

するとその中から1本だけ、ほとんど種の無いものが発見されました。この系統は、はじめは3倍体かと思いましたが。当時、種無しスイカの研究が盛んで、その手法は2倍体と4倍体の品種を交配し、3倍体の種無しを作ろうとするものでした。私が種のほとんど無い系統のブドウの染色体を調べたところ、3倍体より多いことは分かりましたが、その数を確定することはできませんでした。そこで当時の農林省の研究官、山根弘康氏に検定を依頼したところ、「巨峰」の染色体76本より1本少ない75本の染色体を持った珍しい異数体であることが判明しました。これにジベレリン処理してみた所、大粒の完全無核のブドウが得られました。これが「高尾」で、1975年に第264号で種苗登録されました。当時このようなブドウが無かったので大変な人気を呼び、福島、山形の両県でかなり増殖されましたが、

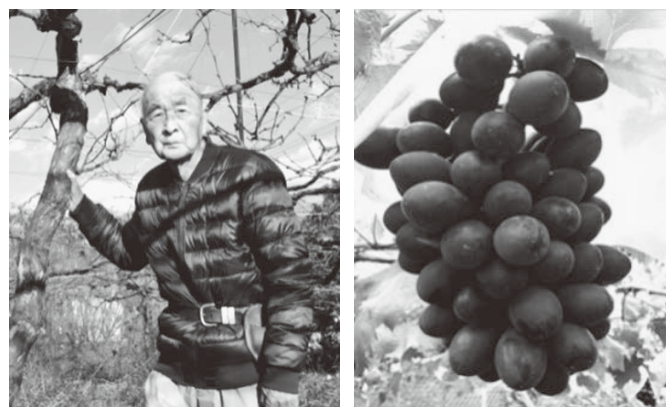
「巨峰」のジベレリン処理技術が確立されるにつれて次第に減少し、現在は山形県の一部と東京都で主に栽培されています。東京都稲城市の「高尾ブドウ生産組合」は1980年に「朝日農業賞」を受賞しました。面白いことに練馬区大泉町の「東京ワイナリー」は、「高尾ワイン」を製造販売しています。早速試飲してみましたが、なかなかの味です。

なお、「高尾」と兄弟品種の「白峰」を育成しました。これは、粒着きは悪いが高品質の緑黄種で、農林水産省育成の有望新品種、「クインニーナ」の交配親の一つになっています。

カキでは同窓の土方智氏と共同で、早生の完全甘ガキ「東京御所」を育成しました（「富有」×「晩御所」×「花御所」, 1988年育苗登録第1561号）。土方氏は、かの新選組の副長土方歳三と血縁関係の硬骨漢で、後にウメの研究で立派な業績を残したので、先年太宰府天満宮から、菅原道真公ゆかりの紅梅と白梅の苗木を送られました。

退職した後は、自宅の畑でささやかな育種を続けました。今までにブドウ「多摩ゆたか」（「白峰」の実生, 1996年種苗登録第5203号）とナシ「本丸」（「稲城」×「豊水」, 2016年種苗登録第25267号）を育成しました。「本丸」は、大きいものは1kgを超える大果の赤ナシで、9月上～中旬に熟します。主に稲城市と府中市にて増殖中で、間もなく農家の店頭にも並ぶ予定です。

私は「高尾」その他の品種を育成したことで、



自宅の「高尾」の第2原木と筆者



2019年2月に「全国新品種育成者の会」から、「育種功労賞」を受賞しました。一つの品種を育成するのに、15～20年の歳月を要しましたが、最近「ゲノム編集」という革命的な育種法が開発されたので、従来の育種法は主流ではなくなると思われます。しかし、大海に舟を浮かべて釣り糸を垂らし、悠々と大魚を狙う従来の方式は、ロマンがあってなかなか楽しいもので、今後も続けるつもりです。

## 2. 果樹の研究生活・恩師・最近のこと

小池 洋男 (農学 S42)

リンゴといえば、蜜と果汁がたっぷりの‘ふじ’をイメージする人が多い。中国、米国、欧州、その他諸外国に広がり世界のリンゴ生産量の25%以上を占めるほど。‘ふじ’といえば、在学時、恩師・岩垣駿夫先生の講義から、戦前・戦中の逆境下でリンゴの交配実生を育成（東北農業試験場）‘ふじ’誕生に導いた新津宏先生（前農工大学教授）の業績、園芸研究への逆風をはね除けてその交配実生を保護した岩垣駿夫先生らの研究者魂に感銘したことを思い出す。また、ブルーベリーの産業確立研究に取り組む岩垣駿夫先生の情熱に触れながら卒業論文に取り組んだ（1966～67年）ことが、卒業後の私の研究者生活の支えとなったことを思い起こす。

卒業後、先祖のルーツである長野県に奉職、研究機関で果樹の実用的研究に永年携わらせて頂いた。卒業時の岩垣駿夫先生の訓示は、長野県ではリンゴなど主要果樹の研究に努力すること！であった。当時、ブルーベリーの知名度は低く、研究取り組みを行う都道府県の研究機関は少なかった。長野県果樹試験場に赴任、担当はリンゴのわい化栽培研究と育種であった。上司の理解もあり、ブルーベリー研究を小規模に取り組むことが許可され、産地育成研究を続けた結果、長野県を全国一のブルーベリー栽培面積に振興出来たことは幸いであった。東京都小平市で日本初のブルーベリー商業栽培を成功させた島村速雄君（同期）や農工大農学部附属農場（当時名称）でブルーベリー研究を推進された石川駿二先生らと、ブルーベリー産業の確立を目指した努力を続けてきたことが思い出である。

また、リンゴといえば、最近注目の新品種‘シナ

ノスイート’‘シナノゴールド’をご存じだろうか。近年、世界のリンゴ産地では小型樹を密植する栽培様式が増えつつある。大樹粗植栽培からわい性台木を用いた小型樹を密植して、良品を省力的に早期多収する栽培様式である。小規模農家がリンゴ高密度栽培を基本に協同組合へ集結、持続可能社会を形成しているイタリア南チロルは世界のリンゴ産業のモデルで、技術者や生産者を案内して現地の友人研究者や農家を訪ねる旅を続けている。

また、リンゴ育種研究の一員として携わった‘シナノスイート’と‘シナノゴールド’を国際研究会等で紹介してきた結果、‘シナノゴールド’を国際的栽培許諾契約に導くことができた。長野県とイタリア南チロルの果物生産者協同組合（VOG）との契約で栽培許諾契約を行い、生産物は国際商標‘Yello’名で世界マーケット（日本市場除く）で販売する方式である。違法に国外に持ち出された種苗の管理方式としても注目されている。

リンゴとブルーベリーの研究・産業振興がライフワーク、時々NHK‘趣味の園芸’やテキストで魅力を紹介、毎年開催の東京農工大学ブルーベリー研究会の講演などを続けている。

## 3. The Fucoidan

玉城 武 (農化 S43)

沖縄を代表する海産物オキナワモズクは、天然種苗から人工種苗を利用する養殖技術が開発されたことにより飛躍的に生産量が伸びました。筆者は、沖縄県の泡盛醸造に向けた酵母を開発し、泡盛醸造の安定化と品質向上に寄与してきましたが、その取り組みは、オキナワモズクの養殖技術の改良に酷似しています。

オキナワモズク *Cladosiphon okamuranus* は、褐藻類に属し、南西諸島の漸深帯に自生しており、方言でスノリ、スヌイと呼ばれ、古くから利用されてきました。1960年頃から海の汚染等で、自生のもずくが減少し始めたため、沖縄県を始めとする南西諸島では網による養殖に力を注ぎました。

天然母藻にたよる従来のやり方は、台風等の影響で母藻の確保が困難となったり、必要な時期に必要な量が確保できなかつたり、また母藻に混入する雑藻が網に付着して、品質を低下させたり、

雑藻をとり除くのに多大な時間を要したりと、現場では頭を痛めていました。この問題を解決するため、フリー化した盤状体を培養して、網に採苗する方法により、雑藻の混入がなく、環境変動に影響されにくい健苗を育成する養殖技術（フリー盤状体培養法）が1996年に開発されたのです。オキナワモズクの盤状体は通常基質に着生して生長するが、海藻体から放出される胞子を、フラスコ内で液体培地に浮遊させて純粋培養し、養殖用の母藻の代わりに使用します。フリー化した盤状体は、漁業者が容易に増殖できるので、適期・適量の採苗が可能となりました。

現在では国内はおろか、日本食ブームのおかげで、アメリカにも渡り、海の雑草seaweedから海の野菜sea vegetableと呼ばれるようになりました。

筆者は、オキナワモズクに由来するフコイダンについて米国市場にむけた産業化をめざしています。その取り組みはまだ緒についたばかりで、多くの課題を抱えています。アメリカ市場は大きく、金持ち層が多く、日本との文化の違いが、人と人の触れ合いに、新鮮さを与えてくれます。とかくオープンで、アウトゴーイング、容易に人を受け入れてくれる鷹揚さ。

しかし日本市場は、狭い上に、何でも揃っていて、モノ余り現象が強く、マーケティング競争は、熾烈を究めます。一般に日本人は金儲けのために働いている、一方アメリカ人は得意とすることを伸ばす、好きなことを仕事にしているとは、UC Davis勤務の、日本人先生の言葉が印象に残っています。日本国内の某企業が、アメリカで年間500億円近い、相当な売り上げをしています。ところが国内では営業成績は良くありません。無理して多額の売り上げをしようとするから苦しくなるんだ、人と接し話し合っていくことに、興味や面白味を持つようにすれば、楽しくやっていけば、営業活動はうまくいく、それはベテラン営業マンの言葉でした。

「生みの親は両親であり、育ての親は東京農工大である、そしてFamily name is Tokyo University of Agriculture and Technology ; Proper name is Agricultural chemistry」とは親しい同窓の先輩の言葉です。小学校への入口へ両親が、厳しい人間社会への入口へ東京農工大学が随伴して頂き、その後も大きな温情を頂き、やりがいのある研究生活への扉を開かせてくれた博士号取得は、同窓の

大先生のおかげであり、また女子大教授への後釜としてバトンタッチして下さったのも、同窓の大先生のおかげであります。亡き恩師は言われた、厳しい社会への入り口をくぐった後は、東京農工大までか、東京農工大からなのか、tillなのか、fromなのか - 師はいつまでも温かいエールを送り続けるぞと。恩師は、オキナワモズクからのフコイダンがFamily name is Tokyo University of Agriculture and Technologyの名称で、広く世界へ出したいという夢を後押しして下さるだろう。意を強くして粘り強く頑張ることが母校への恩返し、親孝行であると考えています。（フコイダンリサーチラボ）

## 4. 新たな時代の森林経営管理

眞坂 京子（林学 S58）

平成最後の30年度は、林業職員としての私の秋田県庁生活も最終年でした。退職を迎える年は、とりわけ早く過ぎるに違いないと予想はしていましたが、9月に、昭和18年林学科卒の父が95歳で亡くなり、葬儀を始め様々な手続きに追われました。

昭和54年林学科卒で同じく秋田県職員であった兄が、平成21年に骨髄の病気で亡くなって以来、長年一人暮らしをし、やがて老人ホームに入居した父を訪ねなかった週末は一度もありませんでした。

林業行政の仕事をしてきましたが、父が山林を遺したので、私は初めて森林所有者という立場になりました。

折しも、平成30年6月に森林経営管理法が公布されて、森林所有者は適切に森林の経営管理をする責務があると明記されました。

私が県に入った昭和50年代終わり頃には、林業行政が目指すべき目標として「来たるべき国産材時代」と表現したフレーズによく出くわしたものでした。

あれから35年、確かに国産材の自給率は、底を打った平成14年（18.8%）に比べて、当時と同等の36%以上にまで回復はしています。木質バイオマス利用が需要を広げる要因となっていることもその背景にはあります。

見かけ上、今は「国産材時代」を迎えるに至っていると見えなくはありません。



しかし、スギの丸太の価格は当時の3分の1まで低下しており、山林を伐採しても森林所有者の手元に入る山元立木価格は7分の1まで落ち込んでいます。父の御先祖様たちが苦しい生活の中で少しずつ買い足して来た山林の価値はとうに薄らいでしまいました。

新たな「森林経営管理制度」や「森林環境税」は、どうしても山林管理をできない場合のセーフティーネットにはなりますが、次の世代が山林を所有し続けられるかまでは解決してくれません。

経費を掛けられないため、手入れもせずに放置し、木材も生産しない持山は地元の市町村に管理を委ねるために集積されていきます。増大する木材需要に応じていくために、より低コストで効率的に木材を生産することが期待されるこの「国産材時代」にあっては、既に個人が山林を所有する時代ではなくなりつつあるように思います。

私にとっては、楽観も悲観もない令和の時代がスタートしたのを感じております。

## 5. 鳥獣による農業被害対策で必要なこと

藤井 猛 (環・資院 H10)

鳥獣による農作物被害は、近年は減少傾向にはあるものの、全国で約164億円(平成29年度)にのぼり、依然として高い水準です。私が住んでいる広島県でも約4億円(同)の被害があり、うち7割がイノシシによるものです。全国でも広島県でも、被害金額の減少に対して感覚的には減ってない、というのが現場の多くの声です。またこうした鳥獣被害は、農業や中山間地域の振興にも深刻な影響を及ぼしています。

私は現在、広島県職員として、このような鳥獣による農業被害に対して、市町の支援や被害対策を指導する行政担当者の育成に関する業務に携わっています。余談ですが、実は在学中は野生動物に関する研究を行っていました。県職員という仕事柄、頻繁な異動で担当業務もその都度変わることが多い中で、今はたまたま、在学中に学んだことを活かせる部署にいます。

広島県における鳥獣被害の主であるイノシシは、県内全域に生息しています。また最近ではシカの分布も広がっており、被害の増加も懸念されてい

ます。こうした鳥獣被害に対して、広島県では3つの柱を被害対策の主として推進しています。それは「侵入防止」「環境改善」「加害個体の捕獲」です。まずは鳥獣を物理的に農地へ入れないためにワイヤーメッシュ柵や電気柵等を適切に設置する「侵入防止」。これが被害対策の基本です。よく農家からは「ちゃんと柵を張っているのにイノシシに入られた。頭がいいからどんな柵を張ってもダメだ！」等といった嘆きを聞くことがあります。しかし実際に現場を見てみると、柵の下がちゃんと固定されていなかったり、電気柵の間隔が大きかったりと、適切に設置していないことも多く見られます。こうしたちょっとしたところを直すだけでも、被害がぴったりと止まることも多いです。次に大切なのが「環境改善」。農地周辺の耕作放棄や藪は鳥獣の絶好の潜み場となります。また放棄された果樹や廃棄された野菜、稲刈り後の二番穂は、鳥獣にとっては格好の食物。残念ながら、鳥獣には「食べても人間に怒られない食物」と「怒られる食物」の区別はつかないため、こうしたものが鳥獣を農地に近づける要因になっています。こうした藪や放棄果樹等を除去するのが「環境改善」です。そしてこれらをしっかりと行うことにより、最後に「加害個体の捕獲」もしっかりとできるのです。

鳥獣被害対策のポイントは、「悪いのは鳥獣ではなくて人間」という意識を持つこと。鳥獣にとっては、日々生きていくために、自らの本能に従って採餌活動を行なった結果、それがたまたま農地であったに過ぎません。農地に出てくる原因を作っているのは実は人間自身であるのです。いかにしてこの意識を変えていくかが、どんな最先端の被害防除や捕獲の技術よりもまずはずっと大切なことではないかと思う毎日です。

## 6. 実学と教養

森田 成昭 (生シ博 H13)

私たちの母校は実学を重視した先端分野の教育・研究機関です。

そんな応用学問の府だからこそ、教養が肝であるといえるかもしれません。今、最先端である技術は数年後、確実に陳腐化します。若い頃に先端技術に触れておくことは大切でしょう。でも、だ

からこそ、深い教養に根ざした基礎学問の素養が求められるのかもしれませんが。それがないと、次の技術が出現したときに対応できないだけでなく、次の技術そのものを創出できません。

私は平成4年に入学し、平成13年に博士の学位を取得するまでの9年間、母校にお世話になりました。卒業研究は機械システム工学科の望月貞成先生の研究室で、最先端の技術に繋がる実用研究の一端を担う実験とデータ解析をする機会を与えて頂きました。大学院は生物システム応用科学研究科の牛木秀治先生の研究室で、「高分子鎖ダイナミックスの階層構造」の理解を深める基礎研究の一端を担いました。そこは、様々な学科や他大学からメンバーが集まっており、研究の自主性が重んじられただけでなく、相互に議論を深めることも求められました。私としては、学部で社会に役立つ技術を創出する実学に触れ、大学院で自らのアイデンティティーが問われる自然科学基礎研究に魅了されたわけです。

私は現在、大阪電気通信大学で研究室を主催し、主に医用高分子材料が生体適合性を発現するメカニズムの研究を行っています。私はこの研究が将来、医用高分子材料の品質向上に繋がり、新しい創薬や治療の開発に貢献することを願っていますし、同時に、人類が合成した化合物を生物が分子認識するメカニズムをより深く理解することに繋がると信じています。私にとって、実学によって実る先端技術と教養に根ざした基礎学問は思考と創成の両輪であり、どちらも不可欠となっていますが、皆さんはいかがでしょう？

私たちの母校は実学志向ですが、私の同窓には基礎学問の方向に進んだ方も多くいらっしゃいます。最後にそのような方々を紹介したいと思います。角森史昭さんは東京大学で、勝本之晶さんは福岡大学で、橋本千尋さんは新居浜工業高等専門学校で、本田康二郎さんは金沢医科大学で、池羽田晶文さんは農研機構で、服部祐介さんは武蔵野大学で、日出間るりさんは神戸大学で、吉村正俊さんは東京大学で、それぞれ学問を追究されています。話は逸れますが、私が所属していたジャズ研からは青木タイセイさん、スガダイローさん、Shingo Suzukiさんといった方々がプロミュージシャンとなって活躍されています。紙面の都合で多くの方を紹介しきれませんが、母校にはこう

いった柔軟な個性を許容する懐の深さがあり、それが新たな時代の核を創出する原動力となっているのかもしれませんが。様々な分野で活躍する皆様の更なる躍進を心より願っております。



現在の森田研

## 7. 母校での再びの研究生生活で感じたことと学生の皆様への期待

乃万 暢賢 (機シス博 H27)

ユニプレス株式会社 技術本部先行技術開発センターに所属しております。乃万 暢賢 (のま のぶやす) と申します。私は2006年に本学工学部機械システム工学科に入学し、4年次に桑原研究室に配属され、その後、博士後期課程を修了するまでの6年間、塑性加工シミュレーションの高精度化に資する材料モデルの研究に取り組んでまいりました。

博士後期課程終了後、現在の会社に入社し、入社後は一貫して材料モデルの高精度化に関する研究に取り組んでおります。私のメインの研究活動は日本塑性加工学会で行っておりますが、たまたま運よく配属された当時の部長が同学会で長年活動されてきた研究者で、材料モデルの研究にも造詣が深く、開発課題としてSD効果(引張と圧縮の塑性流動応力が異なる現象)を解析に導入するという課題を与えて頂きました。ただ、圧縮特性を測る装置が弊社に無く、すぐに恩師である桑原利彦教授と共同研究をさせて頂く運びとなりました。

本研究成果によっていくつかの国際会議やWOS論文に投稿することができ、社内でも共同研究の価値が認められました。同時に色々な材料のデータを広く測らなければ、という意識が芽生え、東京農工大学の共同研究制度の中の共同研究員という形で2018年度より桑原研究室で実験・解析・



論文執筆をさせていただくことができるようになりました。最近では週に1回程度のペースで研究室にお邪魔し、昔自分が携わった試験機を操作し、色々なデータを取得しています。研究者としてこれほど幸せなことはないと思っています。

私は企業での研究者の道を選びましたが、最近になって先生とより密な議論ができるようになってきたと実感します。学生時代は自分のテーマを来る日も来る日も突き詰めて研究に邁進しておりましたが、それ以外の事には目を向ける事はあまりありませんでした。一方、会社では、1つの事に集中する時間はあまり取れないのが残念ではありますが、反面、非常に広く色々な技術に触れることができます。また、企業人であるが故に産業界の実態もお伝えすることができ、結果議論の質が深まったのだと思います。

同時に1つの懸念を抱くようになりました（プレス業界から出たことのない井の中の蛙の戯言であります）。それは日々の業務の枠を超えず、技術のブレークスルーを目指す風潮があまり感じられないことです。特にCAE技術についてそれを強く感じます。その原因は色々あると思いますが、

社会に出てしばらくすると、日々の業務に忙殺され、エンジニアとしてのモチベーションが低下してしまい、高みを目指す気概を失いがちになってしまう方が多いように思います。

学生の皆様には研究者の道を歩むにしろ、企業人の道を歩みにしろ、どうか農工大で得た経験や知見を武器に日々の変化を楽しみ、今この瞬間にベストパフォーマンスを発揮し続ける努力をしていただきたいです。そして自分の仕事を好きになってほしいと心から思います。



桑原先生主催の国際会議「NUMISHEET2018」のWelcome Partyにて（一番右が筆者）



学生サークル 向友会

## 農工大の今 - 第5回 -

### 「旅と鉄道研究会」

旅と鉄道研究会はその名の通り、鉄道などを利用して日本全国を旅するサークルです。農工大ということで鉄道好きの部員が多数ですが、中にはただ旅行が好きという部員もいます。

旅行は基本的に年に3回行い、入部間もない新入生が行き先を決める新歓旅行、夏季休暇に1週間程度の日程で行う夏合宿、卒業生には具体的な行き先を伝えないミステリーツアーの形で行う追いコン旅行があります。この他にも部員が有志を募って企画する旅行や、鉄道模型を



部が保有するレイアウトの上で運転させる模型運転会といった活動も行っています。また最近では農工大と同じ多摩地区の他大学の鉄道系サークルとの交流も行っています。

## 魅

## 【Ⅱ】魅力ある悔いなき仕事人生

## 1. 野生動物との半世紀

赤坂 猛 (林学院 S49)

1968年の春、私は農学部林学科の学生となった。3年に進級し「自然保護学講座」の一員となった。卒業論文として「ニホンカモシカの生態等研究」に取り組み、研究活動は大学院生、そして研究生として継続して続けた。結局、農学部にて9年間（1968～1976）在籍し、1977年の春に北海道庁へ就職した。

カモシカの研究を始めて4年が経過した1970年代の半ば頃から、カモシカによるスギやヒノキ等の造林被害が全国各地で深刻な社会問題となってきた。私はこの食害問題に関与するなかで、カモシカを含めた野生動物行政の抱える「問題等」を見てしまった。我が国の野生動物行政に科学的な視点が欠落していること、専門的な職員が配属されていないこと、などである。

この体験から、私の目指す道は、野生動物の科学的な保護管理行政に関与し続けることとなった。選んだ行政組織は「北海道庁」、29歳のスタートであった。

北海道庁には、30年間勤務し、内20年間は「野生動物」を含めた自然環境行政に係ることができた。北海道では、1980年頃より、エゾシカによる農林業被害やヒグマの「地域的な絶滅の懸念」等の諸問題が、大きな行政課題とされてきた。一方、タンチョウなど絶滅の危機にある希少な野生動物の適正な保護等のありようについても行政は問われていた、そのような時代であった。

野生動物問題が山積する中ではあったが、職場環境には恵まれ、様々な行政課題に鋭意取り組むことができた。最大の思い出は、1990年代初めに野生動物の調査研究機関（環境科学研究センター）の設立に関与することができたことであった。これは、20代後半に行政の道を選んだ際の「目標」の実現でもあった。

道庁退職まで5年をきると、自身のポストは「野

生動物行政」から離れていった。そのような折、札幌市近郊の酪農学園大学（生命環境学科）より教員の話が寄せられた。道庁を早期退職し、2008年春に大学教員となった。私は「生物多様性研究室」の看板を引継ぎ、至福の10年間を過ごした。

研究室では、約20名のゼミ生とともに、札幌市近郊に生息するエゾシカの生態等に関する調査や人と野生動物の関わりに関する調査に取り組んだ。道庁勤務の30年間封印してきた「フィールドワーク」を再開し、秋田や青森等の北東北や新潟にも足を延ばすことができた。なかでも、毎冬、秋田の仁別に通り学生時代のカモシカ調査をゼミ生と共に再開できたことは幸いであった。

2018年3月、私は大学を退官し、現在は一般社団法人エゾシカ協会・役員としてエゾシカの適正な管理を担える人材の育成活動や、ファームエイジ株式会社・顧問として野生動物の軋轢問題等にそれぞれ取り組んでいる。

この半世紀、自身の歩みは野生動物とともにあった。そのスタートは、農学部林学科の自然保護学講座（丸山直樹研究室）からであった。今日、野生動物問題は全国津々浦々において深刻な社会問題を惹起している。農工大においては、今後とも野生動物の保護管理をになう人材の輩出をお願いしたい、と心より祈念している。

## 2. アルコール研究と不時着人生

— 農学、医学、総合人間学 —

長谷場 健 (農化 S49)

当時、農工大学は国立二期校であったため、不時着の挫折感を持つ学生が少なかった。私もその一人で、勉学に意欲がわかず、剣道、バイト、海外放浪の日々を過ごした。卒研選択の時、学力不足は自他共に認めるところであったが、折角大学に来たのだから研究とはどんなものか触れるだけでもと思い、無謀にも成績優秀者が行く発酵・酵素学研



研究室の門を叩いた。同期の予想に反して、体力が評価され入室を許可された私は、研究室ではしばらく右も左もわからず浮いた存在だったが、一島助教授と大学院生の暖かく厳しい指導を受け、半年もすると、すっかり酒麹菌が出す酵素の魅力に取りつかれてしまった。当時は学生の大部分が卒業後就職したが、私は勉強不足を補うため修士課程に進み、酒造カビ・酵母と昼夜を共にした。ただ、研究の世界に魅力は感じつつも研究者になるつもりはなく、天草の故郷に戻って“のんびり”と剣道の顧問でもしながら生物学の教員をやりたいと思っていた。ところが、熊本県の教員試験に2度もそでにされ、人生はなかなか思い通りには行かないなと思っている時、ちょうど文京区にある日本医科大の法医学教室が助手を求めているので、背に腹は代えられぬという思いで応募し、またもや想定外の未知の世界に不時着した。専門も異なり、しかも医師免許のない者が医学部で働くという先の見えない不安はあったが、人を対象とする医学も生物学が基礎だからじっくり学べば何とかなるだろうと楽観していた。教室では法医学的問題の医学鑑定（法医解剖や薬毒物分析による死因究明、親子遺伝関係解明、飲酒関連事件・事故の原因究明など）および研究をやっていた。農学部で酒作りの酵素学を学んできた私は、ここ医学部では酒を飲んだ後の「アルコール（Alc）の代謝および生体作用」というテーマでAlc医学の研究をスタートさせた。そして、幸運にも発酵学で学んだ方法で新しいタイプのAlc脱水素酵素をマウスの肝臓で発見し、これでしばらくは医学部で食っていけるなと思った矢先、日本医大と交流のあった米国シンシナティ大学医学部の眼科学研究室に出張する羽目となり、またもや専門外・想定外の研究を2年間米国で行うことになった。しかし、米国での研究経験と世界各国から来た研究者たちとの交流は、帰国後、Alc医学の研究に復帰してからも大いに役立ち、海外との共同研究も広げることができた。そして、Alc代謝の酵素的メカニズムの新理論を発表し、アサヒビールと共同で日本人のAlc代謝動態と酪酐症状に関するデータベースを作成した。いずれもAlcを農学と医学の両面からアプローチした成果であった。私は医学部でAlcの負の側面を研究しながらも、常々「人類はよくもこんなおいしい飲み物を創ったな」と発酵技術に感動を禁じ得ない。

その後、司法関係から飲酒にまつわる事件・事故

の鑑定依頼が増え、2003年スーフリ事件を始めとして多くの事案を手掛けることになった。また、Alc代謝研究を応用して開発した体内Alc濃度推定法は全国の警察で飲酒運転事故捜査に採用されるようになった。現在私は、日本医大を退職し、神奈川歯科大学にまたもや不時着しているが、私のAlc代謝酵素研究は日本医大の後進達によって想定外の展開を見せており、私も週に一日程度そこで研究指導に当たっている。Alc医学研究は「なぜ人間はAlcを求めるのか、人間とは何か、何処からきてどこに行くのか」という人間学へ私の関心を広げ、現在、総合人間学会でも活動している。

想定外分野への不時着、そこでの人々との出会い、そして命の水Alcの研究は、私の視野を広げ、与えられたものではなく、自ら創造する興奮と感動の世界へ案内してくれた。青春時代に思い描いたものとはかなり異なる地に不時着したが、天草の自然・風土が羅針盤となって、不時着の挫折をあまり深刻に捉えずその都度乗り越え、自然・命・人・社会に関心を深めながら、想定外ではあるがワクワク・ドキドキのささやか研究人生を送れたような気がする。



ほろ酔いの学生達とビール工場見学の帰り

### 3. 一万キロに及ぶ転勤の旅

木下 喜博（林学 S55）

14回と9市町村、私が林野庁に就職してから退職するまでに経験した転居を伴う転勤の数と地方勤務時に居住したことのある市町村数である。

昭和55年春に林学科を卒業して林野庁に入庁し、1か月の研修の後、5月1日付で青森営林局に発令され、連休の終わりに高校時代の友人に見送られて、上野駅から夜行列車で青森に旅立ったのが

その後の長い転勤生活の始まりであった。

入庁2年目に国有林野事業の現場第一線のポストに配置されるのが当時の大学卒の新人のお決まりの人事コースであった。入庁翌年の4月に私は、十和田湖町の奥入瀬溪流の近くの担当区主任に発令され、2年間、南八甲田山麓の国有林の管理に携わった。この2年間は、初めての自炊生活、地元青年団との交流など青春時代の大切な思い出となっている。

入庁4年目の4月、北上営林署の経営課長に発令され、岩手県北上市に転居した。経営課長は管理職ポストであるが、署内での最年少の職員が私であった。団体交渉を経験したり、自分の父親のような年齢の部下を持ったりと30歳にも満たない若造にとって貴重な体験をさせてもらった。

1年8か月後、再び青森営林局の係長に発令され、再度青森市に戻った。1年4か月の勤務の後、昭和61年4月に林野庁本庁への転勤となった。結局、青森営林局管内には約6年間勤務したこととなった。林野庁本庁の勤務は3年であったが、その間に結婚し、子どもも生まれた。

入庁10年目に当たる平成元年4月、加治木営林署長に発令され、鹿児島県加治木町に家族3人で赴任した。子どもは前年の12月に生まれたところで、生後4か月目での転勤となった。加治木営林署は、霧島の鹿児島県側の国有林を管理していた。自然保護問題も抱えており、退屈しない署長生活を送ることができた。

平成3年8月、総務庁行政監察局出向の辞令をもらい、再び東京勤務となった。2年で課長補佐として林野庁本庁に戻った。平成8年4月、帯広営林支局に発令されて、帯広に転勤した。北海道の生活も2年位だろうと思い、観光で道内各地を積極的に廻った。ところが帯広勤務は4年続いた。幸いなことに私も家族も帯広が大変気に入って、4年もあっという間に過ぎてしまった。

帯広の後も道内の異動で函館勤務となった。函館在勤が1年となったところで、娘が小学校を卒業した。今後の転勤生活のこともあり、娘を学生寮もある函館市内の私立の中高一貫校に入学させたが、私は、その4か月後に転勤となってしまった。娘はどうとう学生寮にも入らず、高校を卒業するまでの6年間、私は、北見、大阪、東京と家族を函館に残しての単身生活が続いた。

家族が再び一緒に生活することになったのは、娘

が高校を卒業し、東京の大学に入学した時である。私も運良く、林野庁本庁に勤務していた。しかし、その1年後、私に札幌への転勤の辞令が出て、札幌で単身生活が再開した。

東日本大震災のあった平成23年5月、3年間の札幌勤務を終え、東京に転勤となり、森林技術総合研修所長などを経て、平成27年3月に林野庁情報分析官を最後に林野庁を退職した。

私の35年間の国家公務員生活は、北に南へと、引越荷物と共に動いた、およそ一万キロに及ぶ壮大な旅路のようだった。このような転勤生活は、今の若者に最も嫌われるライフスタイルかもしれない。しかしながら、各地での地元の人たちとの交流の経験、山官として全国の多くの森林に関わる仕事ができただけの経験は、この上ない大きな財産だと思っている。

---

## 4. 農林業で飯を食う

榎本 敬 (林学 S62)

---

農林業で飯を食って行こうと決心して、今年の3月末をもってサラリーマンを早期退職した。埼玉県の林業職員の仕事に不満があった訳ではない。私のような職員を30年以上雇ってくれた県には感謝している。

そもそも、大学時代に勉強しなかった私が県の採用試験に合格するとは思わなかった。合格したのはバブルのおかげだと思っている。そんな不真面目な大学生だったので、就職が決まったものの卒業単位が足りない。一般教養の英語と数学も4年次まで履修していた。最後は、試験の回答用紙に就職が決まったと書いて単位がもらえるように頼み込んだ。そんなことまでして卒業したので、足りたと思った卒業単位が実は不足していたという悪夢にうなされて目が覚めることが年に数回あり、就職してから10年ほど続いた。本当の話である。

県に就職して最初の数年間は、治山や林道工事の現場を担当した。測量、設計、現場監督など、自分の仕事が土木構築物として形に残り、やり甲斐があった。秩父の山深い地域の工事を担当した時は、カモシカやサルなどの野生動物に遭遇することもあった。現場仕事が好きな私にとって、最高の環境であった。

30歳になり、ふとしたきっかけで青年海外協力隊に応募しようと思った。県には現職参加の制度があり、職場の理解も得られこの制度を活用して参加す



ることになった。タンザニアでは牧草種子生産農場に勤務し、灌漑用水の整備を行った。タンザニアでの2年間は、マラリアに2度感染したものの大きな怪我や病気もせずに現地の人々と楽しく仕事できた。協力隊時代の思い出話は長くなってしまうので端折らせていただく。

公務員を30年も続けると部下ができ、部下の仕事管理する仕事も増えてくる。自分が好きな現場仕事も少なくなる。定年までのカウントダウン。再任用制度を活用すれば、この先10年間は県にお世話になることもできた。しかし、その10年、やりがいを持って仕事ができるかどうか疑問が湧いてきた。そんな折、一人息子がJ1チームのプロサッカー選手になった。息子が自分の実力が通用するかわからない未知の世界に挑戦したこと、その結果、大学4年分の養育費を負担せずに済んだことも早期退職の決心を後押しした。息子の契約金を当てにして退職したのだろうと言う人もいるが、契約金はゼロであり、安い年俸（高くても）に手を付けることはない。

退職後は妻の実家の農地を活用して農業を行う予定で現在準備中である。また、せっかく林業に30年以上携わったのだからとの思いもあり、何かしら林業でも収入を上げたいと考え、薪ストーブ等を使う薪の生産を行っている。サラリーマンを辞めて農林業で飯が食えるかわからない。こんな私が言っても説得力がないかもしれないが、何かの決断に迷っている方には本で読んだ次の言葉を贈りたい。「試してみることに失敗はない。」



## 5. オトナの都市・農村の交流のススメ ～新潟県柿崎での田植え報告～

滝沢 将史（生産院 H11）

皆さんお元気でしょうか？私は先日、勤務先の農

林水産省において永年勤続20年表彰を受けてしまい、そんなにおっさんになったかと愕然としているところです。学生時代には農ゼミ「耕地の会（当時の顧問は淵野雄二郎名誉教授）」に所属し、バイク等で日本全国・世界各国の農村に行っては農作業をさせてもらい、酒を飲ませてもらっていた日々が懐かしく感じられます。その経験が現在の仕事にもつながっているのですが、社会人になってからは仕事や子育てで忙しくなってしまう、なかなかお世話になった農家の方々のところにも顔を出せず、恩返しできていないなあと悶々とする日々が20年間続いていました。

そんなモヤモヤを抱えつつ、6月8日（土）、9日（日）新潟県上越市柿崎区へ田植えに行ってきました。柿崎は、塩谷哲夫名誉教授の紹介により学生時代から合宿等で大変お世話になった地域です。耕地の会OBの中には、柿崎での農業実習を経て就農した今井昭仁さん（農学H5）や岸田健くん（生産H8）などもおり、地域の担い手として頑張っています（それぞれの奥さんも耕地の会OGの今井（旧姓竹内）直子さん（生産H9）と岸田（旧姓塩島）涼子さん（生産H8）で2人とも県職員として新潟県農業を支えています）。今回の田植えイベントは、その岸田くんが中心となっている若手農業者グループ「柿崎を食べる会」が、地元の「頸城酒造」とタッグを組んだ「柿崎名水農醸プロジェクト」として実施されるもの。柿崎の中山間には平成の名水である大出口泉水が湧き出ており、それが平場の田んぼまで注いでおいしいお米が作られています。その維持管理を担う集落の過疎化が深刻化していることから、水源の恩恵を受ける平場の若手農家と米・水・人で成り立つ酒蔵とが何とかしようとして立ち上がったのがこのプロジェクトです。

このプロジェクトの趣旨に賛同しつつ、またこれまで抱えてきたモヤモヤを解消すべく、今回は耕地の会OB・OGに声を掛け、オトナの耕地の会合宿として参加することにしました。集まったのは、現助教の水川薫子さん（連農H23）をはじめ、庄島航くん（電子H18）、比企永子さん（物循環H30）、川喜田太郎くん（共生院H30）、笹孝明くん（環資H29）、染谷知良くん（地生H31）など学生時代から柿崎にお世話になったメンバーです。田植え前日は頸城酒造を見学させていただき（当然試飲付き）、柿崎を食べる会をはじめとする地元の方々との懇親会も開催しました。田植え当日は予報が外れ見事な快晴で、

我々の他にも東大農業サークルや酒屋・飲食店団体、地元農業高校の学生達など大勢集まり賑やかに行われました。眺めの良い山の上の棚田で田植えをするのは大変気持ちがよく、田植え後には柿崎のお米やイノシシ汁、地元イチゴ農家のジェラートも満喫しました。また、新潟最大規模のジビエ加工場「柿崎ブーシェリー」なども見学させてもらうなど、日頃のストレスもスッキリ解消されたよい週末でした。

今回の合宿を通じ、地元の方々と、社会人になった自分達がどう柿崎に関わっていけるのかについて意見交換をしました。自分が提案したのは、オトナになってからも無理なく交流でき、かつ少しでも地域活性化につながるような活動です。「買う！（通販等で農産物・食品等を購入）」、「行く！（行って地元のモノを楽しみつつ宿泊）」、「来てもらう！（東京等の消費地や研究機関等の視察）」、「つながる！（SNS等を活用し日頃から気軽に情報交換）」を4本柱に、柿崎を食べる会との交流を軸に、地域の活性

化に一役買えればと考えており、柿崎の方々も賛同してくれました。20年近くのモヤモヤを晴らすべく、同じモヤモヤを抱えた仲間達と少しずつでも実行できればと考えています。

ちなみに私の修論は「都市農村交流の在り方」がテーマでしたが、未完のまま修了してしまいました。今回のような実践を通じてその埋め合わせとしていきたいと思えます。



学生サークル 向友会

## 農工大の今 - 第5回 -

### 「ジャグリングサークル@jug」

ジャグリングサークル@jugでは、大道芸人さんを使用しているような様々な道具（お手玉やボウリングのピンのような道具など）を使ってパフォーマンス活動を行っています。難しそうなイメージを持つ方も多いとは思いますが、毎年秋に開催される学園祭では、ジャグリング歴半年の1年生でも多くのお客様から歓声をいただけるほどのパフォーマンスを披露することができるようになっています。

基本的な活動日は木・金・日曜日の週3日間で、木・日曜日には工学部（小金井キャンパス）、金曜日には農学部（府中キャンパス）の体育館でジャグリングの練習をしています。また、近隣の施設・団体様からパフォーマンスのご依頼をいただけることもあり、活動日以外にもサークル内から数人がジャグリングを披露しに行くこともあります。

学園祭やご依頼などでお客様に向けてパフォーマ



ンスを披露する機会が多いサークルですが、毎年夏にはジャグリングと演劇を組み合わせた自主公演を、冬にはサークル内での大会を行うなど活動の幅も広く、協力・切磋琢磨しながら日々練習に励んでいます。

学園祭や自主公演は一般の方でも観覧することが可能ですので、興味を持っていただけた方は足を運んでいただければ幸いです。



生家・原子力発電所と地震

星野 浩一 (農工 S42)

■生家と世界最大の原子力発電所、そして地震

私は、新潟市に住んでいるが、生家は新潟県刈羽郡刈羽村である。私は、新潟県職員となったことから平成元年に新潟市に住居を構えた。

柏崎市、刈羽村では、昭和53年～平成7年にかけて世界最大の「柏崎刈羽原子力発電所」(以下、「発電所」という)が建設された。生家は、発電所の南東側約3.0kmに位置している。

平成11年、父に続いて母も柏崎市の養護施設へ入所となったため生家は空き家となる。

生家は、新潟地震、中越地震にはなんとか耐えたが、中越沖地震で大きな被害を受けた。



地震等	新潟地震	柏崎刈羽 原子力 発電所建設 S53～H7	中越地震	中越沖地震
発生日	S39.6.16		H16.10.23	H19.7.16
震源地	新潟県粟島沖		新潟県中越	上中越沖
地震の規模	M7.5		M6.8	M6.8
最大震度	6：新潟市		7：川口町	6強：柏崎市
津波	4.00m		—	0.30m
刈羽村震度	3		6弱	6強

●新潟地震

新潟地震発生時、私は大学2年で駒場寮生であった。13：00頃、午後の授業のため駒場寮の玄関を出た時、突然、「ガタン」と揺れ、玄関脇の防火水槽の水がパチャ、パチャ溢れこぼれた。私は、何も気にしないで授業を受け、授業終了後、寮のテレビで「新潟で大地震発生」を知る。慌てて生家に電話したが連絡不通。1週間程度連絡が取れなかった。テレビでは新潟市だけが放映されるだけ。やっと電話が通じ、生家は蔵が雨漏りする程度の被害でほっとした。その後、大きな地震が発生するたびに、「ガタン、パチャ」と「テレビ画面」を思い出す。

●中越地震

中越地震では蔵の屋根瓦が一部脱落した。隣家の瓦葺き職人に無料で修理してもらった。

●中越沖地震

中越沖地震では蔵を見る影もなく全壊した。住宅は、土台が壊れ、家全体が傾いた。「元に戻すのは、新築するより高額となる。」と言う説明を聞き、取り壊すこととなった。

●墓の移転

墓は、中越、中越沖地震、共に半壊した。今後の維持管理等を考え、墓は新潟市に移転した。

■発電所の再稼働と新潟県、柏崎市、刈羽村

発電所は、中越地震、中越沖地震では大きな被害がなかった。発電所は、現在、休止中である。

発電所の6、7号機は、再稼働の条件となる原子力規制委員会の審査に合格したが課題は山積している。刈羽村長は、再稼働に前向きだが、新潟県知事は、「県民の東京電力への不信感」を言及している。柏崎市長は、1～5号機の廃炉計画の策定を求めている。再稼働に向けた道筋は見えていない。(令和元年5月時点)

●新潟・山形地震

ところが、令和元年6月18日、今度は「新潟・山形地震」が発生した。震源地は、新潟地震とほぼ同じ位置である。発生日もほぼ同じ時期である。

最大震度は村上市。妻の生家は村上市である。幸い妻の生家は大きな被害はなかったが、何か因縁を感じる。「新潟・山形地震」は、他地域の地震を誘発する可能性も指摘されている。発電所は、県や市などに対し第一報は「異常なし」を「異常有り」と誤報(ファックス送信)した。15分後に訂正したがお粗末である。刈羽村には生家は無いが大変気になることだ。

地震等	新潟・山形地震
発生日	R1.6.18
震源地	山形県沖
地震の規模	M6.7
最大震度	6強：村上市
津波	0.10m
村上市震度	6強(新潟地震時5)



## 懐

## 【Ⅲ】懐かしき青春時代を顧みて

## 1. 東京高等農林学校の思い出

島 俊雄 (林学 S16)

日記を元に東京高等農林学校の思い出を振り返ってみる。私は大正8年生まれ、高等農林に入学したのは昭和13年日中戦争の最中、戦争の影響が日増しに強まる中、時局に敏感になりつつも学生生活を謳歌していた。

4月「風雨強し。午前10時より講堂において入学式挙行。松岡校長より訓辞あり。これで高農生になり駒場第一寮の15号室に入室した。」

「昼食後明治神宮参拝」「授業が始まる。2時間かけて学生要覧の説明を受ける。昼食後軍事教練。時局のせいカタイ。胸に名前をつけるというのはどうかと思った。夜入寮式後歓迎会、その途中に二年生のM君に召集令状が来る」

5月「対寮銃剣道対抗マッチ。剣道選手として出場し第一寮の剣道は優勝した」

9月「寮の先輩F氏から『改造』を借りて読む。第三国人の見た支那事変がよく書いてあるようだ。日本の将来について深く思う」

11月「明治節。軍に賜った勅諭を奉読したのも時代と痛感する。奉安殿落成につき安置式を挙行」「駒場陸上運動会。終日快晴。林学科学生一同、府中の大国魂神社にて必勝祈願したが、獣医学科の前に敗れ去った。応援団だけは一等と思う。夜応援団幹部一同『鯨由』で残念会、その後、飲み歩き12時頃帰寮、「午後の測量は先生に黙って2時間程野球をして叱られ5時まで測量」

1月「創立記念日。寮祭り。10日間猛特訓した余興は1票差で2位。夜『鯨由』で飲む。」

二年生になると学生の多くは、夏休みを利用して当時の植民地に林学実習に行った。私は当時の鮮満国境に近い満州国林野局図們営林署管内の事業所で、40日間樹幹解析の作業をした。

8月「張家店に着く。昨夜は作業所に虎が現れたと聞く。匪賊(対日戦線)の情報もある」「作業

所でアメーバ赤痢が出た」「満人人夫がついに帰ってしまった。名残惜しいが根本的な問題として民族的感情があり何もできなかった」「突然山火事が起こり5町程燃えて消えた」。

慣れない外地で苦労も多く、また植民地である満州は必ずしも安全な地域ではなかった。

その後、第二次世界大戦があり、平和になってから何回かクラス会が開かれた。

平成7年7月「クラス会開催。全国から12人集合。卒業後50余年の健在な皆の顔に人生を力強く生きてきた歴史を感じる。学生時代の先生の授業、演習林の実習に話の花が咲く。華やかな宴の中で、参加できなかった級友を思い出した。苛烈なる太平洋戦争で戦死した級友が大勢いる。不運にも病死した者もいる。このクラス会に出席できた幸運をしみじみと感じ、今後も力強く生きることを心中に期した」

昭和、平成が終わり新しい時代令和になるが、かつて貧しさ故、女子故に進学できなかった者、学半ばにして、戦争、空襲で無念の死を遂げた者がいたことを忘れないで欲しい。

## 2. 剣道部創世記

小室 敬 (織化 S31)



農工通信を見て、剣道部に大きな影響を受けた方がおられる事を知り、一昔前を思い出す機会になりました。

大学2年(昭和29年)の頃だと思いますが体育の酒井先生と伊藤先生からマッカーサー指令で禁止されていた剣道が解禁になったから剣道部を作るように言われました。何もないところからのスタートなので、先ず先輩たちを訪ねて道具を



譲り受ける事から始め、空手部が使っていた建物の半分を借り受けて有志で稽古を始めました。部員は10人位集まったように思いますが、同期の森君、一期下の花山君、星川君の名前を思い出します。先輩からいただいた道具はかなり古い物だったのですぐにバラバラになってしまい修繕しながら使っていました。稽古場は古い建物だったので時々床板を踏み抜いてしまったものです。

昭和42年の工学部道場の写真を見ると床は立派になっていますが、窓が昔を思い出させます。近くの東京経済大学や一橋大学や東京大学などと試合をするようになりましたが勝った記憶はあまりありませんが楽しく過ごした良い思い出になっています。

伊藤先生にかわいいお嬢さんがいてよく応援してくれました。又、奥様はなぎなたをされていてたまに先生と稽古をしておられました。府中刑務所の道場に出稽古に連れて行っていただいた時にはその道場の立派なのに驚きました。

3年生で昇段試験を受けていきなり2段になりました。4年になると卒論実験などで忙しく引退しましたが、後輩たちが昇段試験を受けると言うので私も申し込み試験場で後輩たちから道具や竹刀を借りて何とか3段になりました。

今も「こうとく会」という名前で剣道部が健在なのを知り本当に嬉しく卒業以来竹刀は握ったことがありませんがペンを執った次第です。

学生生活は今の博物館になっている建物が本館で一階は事務所などになっていました。卒論についた色染化学研究室は東南の角の木造平屋の建物で床は土間だったように思います。染色に使う容器でご飯を炊きおでんを煮て食べたりしました。隣の学校の農場からさつまいもを買ってきて乾燥機で焼いて食べたりもしました。ガスは校内で自家発生しており出が悪くなるとガスタンクを見に行ったらタンクが下に沈んでいると今日はもうガス



は使えないとあきらめたものです。それでも卒業論文は年内に書き上げ繊維学会に提出し、後には学士会の会員になったり、化学会の評議員になったりしました。

今では考えられないような研究室の生活や部活を懐かしく思い出しています。最近が高齢になりクラス会もままならなくなりましたが、後輩の皆さんの活躍を祈っています。

### 3. 若き日の日高敏隆先生の想いで

織田 聡 (獣医 S40)

米穀通帳を携えて農工大府中キャンパス内にある駒場寮にたどり着いたのは1961年の春であった。以来卒業するまでの4年間駒場寮が生活の拠点となった。当時は教養学部があり、入学後の1年半一般教養科目を受講することになっていた。日高先生はここで動物学を担当されていた。まだ30歳過ぎと若く、渡哲也に似た面立ちと所作、ピンクのカラーシャツにブレザーといういでたちで、地味系が主流の当時の教授陣の中ではひととき目立った存在だった。先生の動物学の講義は抜群で、いつの間にか私は人生設計を書き換えることになってしまった。子供のころから動物が好きで、開業医を目指して獣医科を選んだのに、「高校の教師になって本物の生物を教えたい」と思い込んでしまった。この豹変ぶりには背景があった。新入コンパのとき「商業デザイナーになりたいから獣医科を選んだ」「ファンタジーをやりたいんだ」等々私には考えもつかない話に触れ、一直線思考しか知らなかった自分の思考パターンの単純さを思い知らされ自己肯定感が大いに揺らいでいた。まさにその時ショッキングな講義を受けることとなった。そんな時もう一つ運命的出会いがあった。同級生のI君が“Man And The Vertebrates”と書かれたPelican Bookを携えて「これが日高さんの講義の姉妹本だ、一緒に読んでみないか」と声をかけてくれた。彼は1年早く合格し、入学と同時に休学し、将来学者となるべくタイプ、論文収集などに習熟するべく努力し1年遅れの私と同学年になっていた。私はすぐに飛びついた、だけでなく、以来、彼の後を金魚の糞のようについて歩き、週末には奥秩父や八ヶ岳アルプスなどへモグ

ラやネズミといった小型哺乳類の採集に同行していた。そうして3年になり研究室を選ぶ時が来た。I君が「日高さんの部屋へ行くよ」というので僕も一緒に「お願いします」と先生の下を訪ねた。先生は私がかっ付いていることにはかなりびっくりされていたが特別拒まれることもなかった。日高ゼミに入って驚いた。「エルトンですらノーベル賞にならないんだからなあ…」と話しているのを耳にした。生態学を目指す学生にとって最先端を走っているエルトンに対する評価があまり高くないことが不満だったのだらうけれど、そうした会話が日常的に交わされているゼミの雰囲気には衝撃を受けた。

このころ語学力に秀でておられた先生は、週に一度母校の東大へ出かけられて各国から送られてくる諸論文の整理に当たられていた。先生以外にこの仕事をこなせられる人がいないとのことだった。それだけに多分野の研究の現状に通じておられ、ゼミ生の研究テーマはゼミ生自身に任せて、各自に適切なアドバイスを与えていた。だから昆虫から哺乳類まで各自バラバラに研究を行っていた。乙女高原へゼミ合宿で出かけたとき道端に小哺乳類の死体があった。「ミズラモグラかもしれない！」と駆け寄るI君。「チビゴミは！」と死体の跡を覗き込む先生。動物の行動を主にされていたが、ちびゴミ虫の分類については「何か一つは分類に関することをしていないとその分野が分からなくなるから」とよく話されていた。そんな日高ゼミにあって、金魚の糞の私はこれといったテーマを持っていなかった。「寄生虫の行動についてやってみたい」という私に、図書館に関連書籍を入れてくださったり、山梨大へ連れて行ってくださるなど私のテーマ設定に異例の援助をいただいた。私は気づいていなかったが先生の所属と関係のない獣医科の学生をゼミに入れるなど獣医科の教授陣からすると内心穏やかではなかったのだろう。学会誌に研究論文が載るなど学者の仲間入りを果たしたI君なら言い訳が立つが、これと言って成果を上げない私の存在には困られていたのだろう。そうこうしているうちに先生はノーベル賞を受賞したローレンツの下へ研究留学されてしまった。先生不在のまま卒論要旨をフランスの先生の下へ送り合格をいただいたときは正直ホッとした。ところが事件が起こった。内科にいた寮

在住の同級生が「織田、先生らが国家試験の不合格者予想の博打をやってるが、お前と留学生だけになっていたぞ」と話してくれた。寮生たちが「合格を目指して勉強会をやろう」と毎夜日高ゼミの部屋で特訓してくれた。この時初めて先生の苦しい立場を理解した。幸運にも合格し先生の顔に泥を塗ることだけはしないで済んだ。愛媛に帰って教師勤めをしている私に、先生から「織田の研究を後輩に引き継がせるから」との連絡をいただきやっとなんか心落ち着いた。

先生 僕もそちらへ移住する日が近づいています。その時はうんと恩返しさせていただきますから。

#### 4. 真に人生の基盤と豊かさを身につけた学生時代

堀 俊一 (養蚕 S47)

##### ・卒論研究で身につけた多くのこと

私は千葉県の普及指導員を退職して10年になる。在学中、卒論研究の実験材料を得るためにナス、トマト、クワを栽培した。花粉と種子を得るためであったが、研究室のコンパの食材を確保するためにその後も栽培を続けた。頑張ってかん水や追肥をやったが、野菜栽培の良い経験になった。また、論文に写真が必要だったので、研究室で一眼レフカメラの接写をおぼえたが、後々趣味と実益を兼ねて害虫や天敵の写真を撮るときに役立った。

##### ・農業改良普及員になって

卒業して普及員になったが、土壌学、肥料学と昆虫学がすぐに役立った。土壌・肥料については、基本理論とその産地のローカルな特徴（たとえば、土質、気象条件）を把握して農家に説明するのがよいが、私は好んでこの兼ね合いを考えた。また、昆虫学の知識で害虫の診断ができたので、新米普及員でも農家の信頼が得られた。

さらに、卒論のために急遽発芽生理学を勉強したが、これも普及の現場で発芽不良が発生したときの問題解決に役立った。資材や労働コストをかけて畑の準備をした後で発芽に失敗したら、農家の損失は大きいのである。

##### ・レイチェル・カーソン著『沈黙の春』との出会い

話は飛ぶが、今日、食の安全・安心への関心が高まっている。退職後は、妻の実家の田畑を借り



て有機、無農薬栽培を始めた。学生のとくに、農薬などに過度に依存する農法を批判したレイチェル・カーソンの『沈黙の春』を読み、感動したからである。

ところで、化学合成農薬と生物的農薬の別なく、農薬は終齢幼虫よりも若齢幼虫によく効くのであるが、終齢幼虫の図鑑はあっても若齢幼虫の図鑑はまだなく、不便だった。そこで、卵や若齢幼虫を採集し、飼育してから調べた。成長させてから名前が分かるのである。在職中から若齢幼虫の写真集の必要性を感じ、退職したら作りたいと思っていた。

さて、有機、無農薬で野菜を栽培したところ、4年間で害虫被害がほとんどなくなった。雑草を部分的に刈り残し、天敵の好む環境作りに努めた。クモ、テントウムシ、アマガエルなどが増えた。我が家の野菜と落花生は、味と安全・安心の面から消費者に好まれた。

就農後10年たったところで、この経過をまとめ、拙著『私のえこひいき農業』を刊行（筑波書房、2018年10月）した。この本は、野菜栽培の体験をもとに、雑草の管理、土作り、害虫、天敵についての知識、技術をまとめた有機農業の本である。卒爾ながら、本紙面をお借りして、天敵による害虫防除に興味のある方にこの本をおすすめします。

農学関係の単位をとった人は、その気になればすぐに、上手に野菜が作れます。



草野元同窓会長(右)が落花生種まき援農に来てくれました

## 5. 偉大なる大地・母校 知徳体の鍛錬

安威 誠 (環保 S52)

### ①農工大とのご縁

それは自宅浪人だったある日の新聞記事で人生の進路が決まりました。

「国立大初の環境関連学科設立！」みたいな記事でした。1972年ストックホルムにて第1回国連環境会議が開催され、大石武一2代目環境庁長官が出席するも、あまりの政府の取り組みの遅れに猛省。時あたかも公害日本、四日市ぜんそく、イタイタイ病、水俣病、何ら対策がなされぬまま進む列島改造。高度経済急成長に潜む様々な公害が蔓延するも無為無策の状態。そのニュースで「東京農工大学」を知り、新設の「環境保護学科」受験のために東京へ。生きる道を決めたのです。

### ②環境保護学科で「知」を学ぶ

宅浪から、脚光を浴びた「環境保護学科」に合格した若者にとって、すべてが新鮮でした。1期生の仲間たちは、半分は都会、半分は地方。いずれも皆優秀で刺激を受けました。4年次「生物化学汚染」研究室に所属し、動物実験による「生体に及ぼす重金属の慢性毒性について」を研究テーマとしました。今考えるとよくぞマウスによる実験設備を整えていただいたものと恩師には感謝しかありません。合わせて「森林浴」ブームの基礎となる“良い環境”とは何かの研究も並行してできたことは有意義でした。今もSDG'sに繋がっています。

### ③樗寮で「徳」を積む

人生いかに生きるべきか。何のために学ぶのか。我々は今何をすべきか。今ある社会問題を解決する我々の役割とは。そのような哲学めいた話題を夜を徹して議論していたのが懐かしい4年間の寮生活。4人部屋と毎年入れ替わる制度で多くの寮生との関わりが生まれました。また、寮委員や寮祭などを通じて、一つの目的に沿って多くの人に理解、協力してもらうための民主的な手法やリーダーシップ「徳」の大切さを学ぶことができ、社会へ出てからも大いに役立っています。

### ④剣道部で「身体」を鍛える

新入生の頃、馬術部、剣道部、野っ原の会、寮ではフォークソング・どろんこ、写真部などに籍を置きましたが、4年続けたのは、剣道部とどろんこでした。剣道は体を鍛えるために頑張り続けたわけですが、体力だけでなく精神面の鍛錬にもなり生涯を通じて役立っています。またそこで鍛えあった仲間は今でも付き合いがある貴重な仲間「交剣知愛」です。妻とは「どろんこ」のご縁です。この学生時代の趣味であるスポーツ（剣道）と音

楽は、生涯の生きがいにもなっています。

### ⑤人生100年時代の基盤は20代で育まれる

卒業後の進路は、研究者か、公務員・教員か、民間・マスコミか。脚光を浴びた「環境」を生かせる道は石油ショックの影響もあり就職戦線はかなり厳しいもの。縁あって出版社・学習研究社（現学研ホールディングス）へ。営業を皮切りに、編集長、マルチメディアD、経営企画室長、ITプロデューサー、そして教育総研所長、公益財団常務理事と42年間様々な仕事をさせてもらいました。

現在、この間の経験は貴重だということで、講演会・セミナー講師を頼まれることも多く、次世代のためならと顧問、アドバイザー、理事、参与などの立場で社会への恩返しを始めているところです。こんな65年の人生の基盤は偉大なる大地・母校で培われたのです。



1975年剣道部夏合宿 前列右端白い道着姿が筆者

## 6. 櫛寮の思い出

天井 滋則（林産 S60）

今から40年前、農工大に入学し、今年度で定年を迎えるにあたり、学生時代が懐かく思われ、おぼろげながら回想してみた。



中央線東小金井駅から降り、地図をたよりに農工大工学部の敷地に入って、すぐ4階建ての櫛寮

を見つけた。玄関脇には新入寮生の荷物の山、右手に食堂、風呂場の側、汚い廊下を歩いて案内されたところが、一番奥にある中央線沿いの3棟の一角の部屋であった。

当時は『嗚呼!! 花の応援団』という漫画が流行っていたこともあり、大学という所は体育会系の厳しい上下関係が存在しているものだという思い込みで上京し、高級な京菓子を土産にした。部屋はカーテンで仕切られる簡易なベッドと机、造り付けの小さなタンスがあり、一人当たりの面積は4畳程の狭さだが、それなりに居処が確保できた。

当時の部屋は4年から1年までの4人部屋で、緊張した面持ちで挨拶したが、どの先輩方も「よろしくね」と軽く言われ拍子抜けしたと言うか、安堵した。

それなりに寮生活に慣れた頃、新入寮生歓迎コンパが食堂で開催された。新人は自己紹介のほか、一芸を披露、軽く2合は入るご飯茶碗で、日本酒の一気に飲みをさせられ、目出度く、新寮生として認められるのであった。

寮で一番お世話になった場所は、玄関ロビーからすぐ右側の食堂である。食堂奥に配膳する所があった。食器は全て淡い黄色のプラスチック碗、ご飯は麦と白米がブレンドされた麦ご飯、すぐに慣れた。

各フロアに和室があり、壁には駒場小唄、西ヶ原寮歌の歌詞やスローガンのような落書きもあった。

サークルや学科がここで飲み会し、残った酒を持って、「〇〇ストーム!」と連呼しながら部屋に乱入し、無理やり酒を呑ませるのであった。

寮祭が6月ごろあり、仮装行列で東小金井の駅や農工大通りなどを練り歩くほか、ゲーム大会、櫛寮生による美人コンテスト等の行事もあった。とにかく、350人程の大きな寮で、全国各地からの出身者がおり、夜しか寮に居ない人、学校に行くこともなく棲みついて居る人、酔っ払って4階から落ちて無事だった人等多種多様な構成であった。

寮生活も馴染んでくると、頻繁に通る電車の音にもすっかり慣れ、夜型の生活となり、だんだん起床時間が遅くなり、午後1時にも起きられないこともあり、大学の授業の要領を諸先輩から会得し、だんだん大学へ行く機会が少なくなった。



寮では、アルバイトの斡旋があり、多種多様なアルバイトを経験させてもらった。その多くは、体力系が多く、引っ越し、清掃、土木作業、警備員、ウルトラマンショー、騒音測定、交通量調査などいろいろなバイトをし、少なからず役にたったような気がする。

今から思えば、他の寮生、寮の食堂のオバちゃん、バイト先でお世話いただいた数多くの人に迷惑を掛け、助けられ、支えられていたんだとシミジミ思う。今更ながらこの場をお借りして感謝申し上げます。

## 7. 農工大を卒業して30年、いま思い返すこと

藤掛 雅洋 (林学 S62)



「藤掛君、学校を卒業したら学校を忘れなさい。」

私は昭和62年7月に農学部林学科を卒業しました。7月？そうです。お恥ずかしい話、一般教養の単位が足りなくて留年し、教授にお助け懇願？のレポートを多数提出してのお情け途中卒業でした。卒業証書授与は、学部長室で当時の学部長であり、ゼミの恩師でもあった野々村先生と2人だけで、冒頭の言葉は、その際先生からいただいたものです。「学校で過ごす時間はたった4年です（自分は4年と少し）。4年たって再会した時に、ここで過ごした4年間の何倍も充実した時間を過ごし、学生時代の話など語る暇が無いくらいにならないとだめですよ」と。

作家の司馬遼太郎先生は、ある著作（インタビュー記事だったかもしれませんが）で、「人生で重要なのは50代をどう生きるかで、そのためには40代が重要。飲み会の時に、体の不調のこと、仕事の愚痴しか話題が無いような人が多いが、それではその先が知れている・・・」というようなことを言っておられました。

今回ご縁があり（先輩からのご下命（笑））、農工通信に寄稿させていただく機会を得ましたが、お話をいただいた時に思い出したのが、冒頭の先生のお言葉でした。今、改めて先生のお言葉を振

り返り、果たして、自分はどう生きてきたのか？

卒業して4年どころか、30年以上の時間が過ぎ、50代の半ばにさしかかり、はなはだ心許ない限りです。

さて、私は現在、岐阜県庁林政部に勤め、「木育」という取り組みを推進する仕事に従事しています。岐阜県で推進している木育は、生涯を通じて森や木とふれあい、関わりを持ち続けていくことで、豊かな人生を送り、また、その関わりの中で森林を守り、育て、活かしていくことの大切さを伝えていく取り組みです。自分が学び、また業務の中で普及・指導してきた産業としての林業とは少々異なる世界ではありますが、未来に向け、人に伝えること、託していくことの難しさ、新鮮さに戸惑いつつ、残り少なくなりつつある社会人人生を過ごしています。

そうそう。昨年、就職ガイダンスで久方ぶりに農学部キャンパスを訪れ、その帰りに、国分寺駅前で懐かしのスタ丼（スタミナ丼）を注文。かつてのように大盛りを注文したのですが、結果は見事にギブアップ。こんなところでも齢と時の流れを実感したのです。



### 福島県から大分県へ、“同窓”に支えられた我が人生

松久 房義 (蚕糸 S50)

昭和46年、農学部蚕糸生物学科（改称一期生）に入学した。高校の修学旅行以来の東京、JR国分寺駅近くの古い木造アパート、三畳一間で自炊し銭湯通い、四年間の貧乏生活が懐かしい。

昭和50年に卒業し福島県蚕業試験場に就職した。時すでに養蚕業には斜陽の風が吹き始めていたが、群馬、福島、長野の養蚕業はまだまだ盛んで新社会人の夢を描きたてるに十分な魅力があった。農工大の先輩が活躍する試験場で蚕作の安定や省力化技術等の課題を担当。併せて寄宿舎の舎監として、短大生や講習生と寝起きを共にしながら、将来の夢について語り合ったことが懐かしい。

就職して3年余が経過したある日、大分の実家から電話があり「大分県への転勤の話があるらしい…」父の声は弾んでいた。その夜、指示された県庁の御方に電話して事情を伺う。『自分も農工大の卒業生、福島の試験場で頑張っていることを知った。君に故郷で働く意思があれば人事当局と協議をするが…』。突然の話にびっくり、嬉しくもあり動揺も。数日考え抜いた末に職場の上司に事情を打ち明け「大分県への転勤」を願っていた。新採から3年間は育成期間、一人前の研究員に育てた矢先に他県へ異動とは、人事当局が承諾する訳がないとの不安も。そうした折、試験場長からは『本人のためになる判断が一番』との理解を頂き、人事当局との難航協議を経て福島県と大分県の割愛人事が整い、大分への異動が許された。農工大の大先輩である当時の試験場長が下してくれた「相手の立場にたって判断すること」は一生忘れられないご恩であり、我が人生の教訓でもある。

大分県に着任した後、蚕業指導に従事した期間は僅かであったが農政企画、東京事務所、園芸振興、新たな米政策、担い手対策など農政の主要部門を担当し、平成24年3月、農林水産部審議監を最後に退職した。この間、福島の関係者から頂いたご恩、農工大の同窓として福島県、大分県の関係者から頂いた支えは忘れることはできない。「福島県は、私にとって“心のふるさと”」です。

そんな福島が2011年3月11日の東日本大震災で一変！多くの県民が避難生活を余儀なくされている状況を知るにつれ「昔のご恩を返さねば…」との思いが高ぶってきた。それから1年、県庁を退職直後に大型旅行バックと寝袋を抱えて福島に向かった。ボランティア団体の紹介で楢葉町の方々が集団で避難している「会津美里町の避難住宅」での支援活動に参加した。約一ヶ月間、自身も避難住宅の一室で寝起きしながら、原発事故の放射能を避け、遠い会津の地で不自由な避難生活を強いられる楢葉町民と生身の交流を交わすことができた。不思議なもので福島の地に立ち、復興に頑張る福島県民の姿に接したことで「胸のつかえ」も和らいできた。

しかし、福島復興への道のりは途方もなく遠い現実を思い知らされた。今、自分にもできる支援は「福島県産品」を買い求め、風評被害に苦しむ農林水産業者の汗に報いるために、全国で活躍する同窓仲間とともに支援の輪を拡げていくことしかできない。福島復興への道程はまだまだ遠いが、一日も早い日常生活の回復を念じてやまない。頑張ろう ふくしま！！（大分県支部長）

#### ◆追悼

5月末、その「御方」の訃報を耳にした。当時のご支援に心から感謝し、ご冥福をお祈りします。合掌

職場の親睦旅行でカレイ釣を楽しんだ松川浦、定宿の民宿は津波で全壊していた。3年後、おかみさんと約40年ぶりに再会、松川浦の復興、福島の復興を誓い合った。



左写真・平成24年、右写真・平成27年





## 【Ⅳ】海外交流 深くいつまでも

### 1. 中高年のチャレンジ —中国・大連に遊学して 羽田 有輝 (製糸院 S45)

我が人生の課題にチャレンジする一環として、73才から約半年間、中国は東北部・大連市のとある大学に単身語学留学生生活を送ってきました。

日本と中国とは地理的には隣国であるものの、お互いの理解は余り進んでないようです。現実には中国に暮らしてみると、その点が良くわかってきました。



#### 1. 70才過ぎての中国留学、話題が変わる。

日本での高年者における同年代の話題と言えば、腰が、足が、どこそこが痛い、血圧が高い、低い。糖尿病が云々など病気の話題が多いでしょうが、高年者の中国留學生活では、その環境が中国人や、欧米人その他の外国人の若い人との会話が圧倒的に多く、日本でのようなこういう話題は全くありません。その様な話をしている暇もありません。この点、久しぶりに若さを満喫いたしました。

#### 2. 中国の大学は、広い。かつ、キャンパスは生活そのもの。

食堂だけでも5から6つもあります。(留学生食堂が二つ、教職員食堂、中心食堂、学生食堂他) また、銀行(大学構内に3つ、校舎内外にも自動預け払い機(24時間営業)があり、)スーパーマーケット、コンビニ、病院、薬局、本屋、美容

院、床屋、洗濯屋、果物屋、花屋など生活に必要な施設はほとんど揃っています。中国人学生寮は、男は4人部屋、女性は6人部屋でいずれも風呂(シャワーも)はなし、近くの学生専用風呂に行き、トイレは共同とのこと。

中国人学生は、ほとんどの時間を学内で過ごします。そして、学内は生活そのものですから、学生同士のカップルが生まれやすいです。キャンパス内では手をつないで歩く光景が日常茶飯事、午後11時は寮の門限、門限近くは抱き合っているカップルが続出しています。

#### 3. 中国での新しい発明

日本人の想像を超えるスピードで変化する中国。最近の新しい発明と言えるのは、キャッシュレス決済とシェア自転車でしょう。

中国では、スマートフォンの普及率は非常に高く、モバイル決済の普及は驚くべきもので、スーパーや飲食店はもちろん映画館や高速道のチケット、更には各種デリバリーサービスや露店での買い物さえもスマートフォン1つで決済できます。現金払いが未だに一般的で、クレジットカードの利用もあまり多くない日本と大きな違いです。

どこでも乗り降り可能なシェア自転車についても、こちらもスマートフォンで簡単に利用でき、公共交通機関を降りてから目的地まで少しの距離を歩かずに済み、「最後の1キロの問題を解決した」といわれています。この点、なぜ日本で普及していないのか。

中国メディアは、この二つの発明について日本人の慎重さを指摘しています。モバイル決済に関しては、中国のように偽札があまりないだけでなく、個人情報への漏洩や使い過ぎでの破産を心配して広まらないと指摘し、シェア自転車も同様で、中国ではマナー違反も多く報じられているが、どこでも乗り捨てられるのが魅力のシェア自転車は、日本では法律上乗り捨てることができず、その上、日本では道路が狭いので実用的でないことも影響しています。

これらの発明は、非常に便利で中国人にとって生活を一変させたことは否めないです。同時に、こうした新しいものを前にしたとき、日本人は考えられる問題をすべて洗い出して解決策が示されて後、初めて新しいものを導入するが、中国ではまず始めてから、問題が出ればその都度対処する違いも関係しているようです。この点、中国人は新しいものへの対応能力が高いともいえるでしょうし、一方の日本人は比較的、慎重で保守的であるとも言えるかもしれません。急激な変化に慎重な日本では、モバイル決済とシェア自転車が普及するには多くの時間がかかると言えましょう。

お陰様で2018年1月5日の終業式には修了証書のみならず、皆勤賞も受領しました。皆勤賞は、日本のように賞状だけでなく大枚の奨学金（現金）をいただけたのは、びっくりです。中国独特の配慮ではないかと感心しています。

大枚の奨学金で、老朋友（親しい友人）の若い中国学生とともに高価な牛肉のしゃぶしゃぶを堪能いたしました。

## 2. カントー大学（ベトナム）強化事業に関して

安藤 哲（植防 S47）

国際協力機構（JICA）のチーフアドバイザーとして、2016年3月から2年ほどカントー大学に滞在しました。カントー市は、ホーチミン市の西160 km、ベトナムのメコンデルタの中央に位置する人口約120万人を有する都市です。メコンデルタは稲作を中心とする豊かな農村地帯ですが、沿岸部はエビなどの養殖が盛んであり、それらの生産技術をカントー大学は支えています。創立53年の歴史を持ち、医学部を2003年に分離していますが、工学部、経済学部などをも含み4万人ほどの学生が学ぶ総合大学です。特に農学部のカンパスには、JICAの無償開発援助により25年ほど前に建設された立派な建物が連なっています。

農工大とカントー大との関係は古く、大江礼三郎先生が責任者であった1995～1997年のJICAによる支援プロジェクトに端を発していると記憶しています。その後、1998年の予備調査および1999～2002年の「農学における環境教育の充実」のミニプロ

ジェクトに加え、様々な農学分野での共同研究と、多くの留学生の本学への受け入れが行われています。私も2人のカントー大のスタッフを国費留学生として受け入れ、博士論文の作成を指導しました。

ベトナムの近年の経済発展は著しく、大学もレベルアップしつつあります。しかしタイやマレーシアと比較してもかなり遅れをとっていることから、ベトナム国教育訓練省は国内の4大学を拠点校として海外からの支援の下に底上げを図ることを計画し、そのひとつとしてカントー大の3分野（農業、水産・養殖、環境）における研究・教育能力強化を日本政府に求めてきました。これを受けJICAは政府開発援助（ODA）として、新たな2つの研究棟の建設を含む100億円を越える円借款（ODAローン）による「カントー大学強化事業（2015～2022年）」を、更にそのサポートとして無償援助となる「カントー大学強化附帯プロジェクト（2016～2021年）」を立ち上げました。本学を基幹校として北大や海洋大などの9大学が支援委員会（委員長：有江力農工大副学長）を組織し協力することになり、私はカントー大と9大学との調整役として現地に常駐しました。

円借款では、建物や研究機材等のインフラ整備に加え、カントー大スタッフの学位取得に向けた9大学への留学や短期研修による人材育成、9大学の教官との共同研究（36課題）による研究活動の活性化が盛り込まれています。本学では、既にカントー大の教員5人が博士課程に在籍し、25人ほどの先生方が共同研究に参画されています。これに加え付帯プロジェクトでも、気候変動をキーワードとして4件のモデル共同研究を採択し、また気候変動に関連した共通カリキュラムを含む農学部、水産・養殖学部、環境学部における新たな修士課程のプログラムを作り上げました。日本側の先生方に研究費等の配分は無く負担の多い側面はありますが、メコンデルタは世界が注目する生物生産圏



カントー大学農学部のカンパス



であり、そこでの農水産業の成長、および気候変動を含む環境問題への対応に必要とされる人材の育成に向けて、本プロジェクトは現在、展開中です。

### 3. 韓国との獣医学術交流を始める

天野 弘 (獣医 S53)

昭和53年に獣医学科を卒業し、静岡県に入庁後家畜衛生畑を歩き、平成28年退職し、現在公益社団法人静岡県獣医師会に事務局を兼ね役員として勤務しています。本獣医師会では、日韓関係が難しくなる中、3年前から韓国忠清南道獣医師会と学術交流を始めています。

静岡県では10年以上前からソウル事務所を設置し、5年前から忠清南道（百済の国）と交流を進めていました。当初、竹島、慰安婦、徴用工問題など国政レベルでは抜き差しならない状況で、思うような交流ができるのか一抹の不安を感じながら交流を始めました。ところが、交流する中、接する韓国人の人達は、大変穏やかで親日的で、驚かされました。そして、若い人達の中でも、日本に関心が高く日本語を勉強している人の多いことに気づかされました。1年前に来日訪問団の一人で道庁の若手職員は日本が気に入って、帰国後日本語を勉強していると再会時に話してくれました。日本の中で、韓国語を勉強している人がどれほどいるのでしょうか。忠清南道庁では、職員を日本に留学させ勉強させています。今回の交流の連絡を担当しているイムさんは獣医師で、道庁から早稲田大学に語学留学しています。文政権以降、日韓関係は戦後最大に冷え切っていると言われる中、昨年度の訪日韓国人は700万人を超すなど、民間レベルでの交流は伸びていることが報道されています。通訳をお願いしている在日韓国人の女性の方は、日本が好きでも子供の頃の反日教育が身に付いているため、感情的になると反日になってしまうと話してくれました。スポーツの日韓戦の状況がこれで良くわかりました。

実は忠清南道はかつての百済の国であります。静岡県と百済国とのかかわりは、今から1,300年以上に遡ります。660年、百済は唐と新羅に攻められ降伏の状況でした。そのため、百済は、日本（大和朝廷、中大兄皇子）に救いを求めました。663年、第3次救援軍として、駿河国から1万余人の船団



百済の城址(公山城、公州市)筆者右端

が清水港（静岡市清水区）から出陣しました。しかし、白村江の戦いで百済・日本連合軍は敗れ百済の国は消滅しました。なぜ、大和朝廷は滅亡する百済に援軍を送ったのか。百済国王子（余豊璋<sup>よほうしょう</sup>）は中臣鎌足ではなかったかとの異説があります。白村江の戦いは、古代史の中のターニングポイントでもあったのです。

これまでに、お互いの創立記念式典への招待、セミナーの開催、動物病院等の見学や意見交換など大変有意義な交流が進められています。従来までわからなかった韓国における獣医療の情報がこの交流を通してわかってきました。今の若い獣医師は、国情が似た日本からの情報を大変ほしがっているのです。ゴタゴタは政治や行政に任せ、日韓の学術分野での交流は今後進めていく必要性を強く感じています。執筆中に、半導体原料の輸出規制が始まり、今後の行方が大変心配ですが、歴史ある隣国同士が仲良くなることに微力ながら役立ちたいと思っています。

### 4. Essay

Kenford Luweya Aeron Banda  
農学府国際環境農学専攻2年（在学中）



マラウイ共和国カスング県ウィンベ地区出身。バラカ中等学校教員。

母国ではこれまで6人の青年海外協力隊員と協力してきました。そのうち5人は数学担当であり、この経験は技術面で大いに力となりありがたかったです。協力隊員の仕事ぶりをみて、私は来日前から日本を好

力隊員の仕事ぶりをみて、私は来日前から日本を好

きになりました。耐久性のある製品に関連して、現地では以前から「Japan」とは比喩的に「長期的または耐久性がある」という意味で理解されていました。この従来の理解と協力隊員の貢献から、日本の教育システムは永続的であると私は期待するに至りました。日本留学のチャンスが来たとき、私は公立の大学を希望していたこともあり、私は農工大で学ぶことをためらいませんでした。農工大は国際標準の人材育成により、私にも私の国にもよい影響を与える大学だと信じています。

実際、日本の大学教育は、自主的な学びに基づいています。教育機関は、インターネット、書籍に加え、教授が学生の研究の進捗状況を指導する毎週

の研究室セミナーなどの学習に役立つ環境を提供しています。教授は、学生に最初に考えさせてから、学生の考え方に沿った指導をしています。さらにユニークな点は、主指導教員のほかに、研究の技術面を指導する副指導教員が設けられていることです。日本の教授は理論と実践を行います。一方、マラウイの理系大学では、教授は授業で教えるだけで、実験室の仕事は技術職員に任されています。そのため教授は実践的というよりも理論的になります。以上は自身の経験を基に一般化したものですが、日本の高等教育の強みではないかと考えています。

日本語訳 大学院農学研究院講師  
及川 洋征 (林学H2)

## コラム<復興への想いひしひしと> 3

### あれから9年 被災地は今

鈴木 正彦 (林学 S57)

今回もまた「被災地メッセージ」的なコラムになりますが、お付き合いください。昨年のNo.96号では「もしも大地震に遭遇したら」ということで、発災時の自分の体験談を投稿しましたが、元宮城県職員として皆様への御礼を言い忘れていました。申し訳ございませんでした。大学や同窓会からの多大なるご支援をはじめ、卒業生の皆様の公私に渡るご理解とご協力に心から感謝申し上げます。今年度においても卒業生の富山県庁職員の方が自治法派遣で宮城県に応援に来ていただいております。皆様には今後ともいろいろな場面でお力添えをお願い申し上げます。

さて、今年の3月で東日本大震災から9年が経ちますが、自分では「あつと言う間」という感じです。宮城県内では復興まちづくりやインフラなどのハード面においては、これからが最盛期というところもありますが、全体的には最後の仕上げに入っているような状況で、復旧・復興が完了したようにも見えます。一方、時間とともに特にソフト面や生活面では、様々な「想定外？」の問題や課題が浮き彫りになってきました。地元ではいろいろな角度から検証あるいは問題提起されており、今回、宮城県内での実情を報告します。

「グループ補助金制度」により水産加工場は再建できたが、不漁や販路喪失さらには働く担い手不足等により経営が困難になり、自己負担分の資金返済が不安。災害公営住宅は「公営住宅法」に基づき、収入超過による明け渡し義務や家賃の割増しが生じるが、「家賃の減免期限」が自治体毎に異なるため県内では不公平感が発生。また、災害公営住宅では「コミュニティ」や「孤独死」の問題。住居は高台に移転したが、高齢者は日常生活における買い物や病院等への移動が困難で不便。被災直後、避難所が満杯で入れなかったり、家族に要介護者や障害者がいたりといった理由で被災した自宅で生活を続ける「在宅被災者」には高齢者が多く、被災家屋への各種補修支援制度も複雑かつ低額で、ほとんど活用されていないという実態。小規模集落が多かった沿岸部では人口減少や限界集落に拍車がかかる。借り主が死亡した場合の「災害援護資金」の回収に苦慮。まちづくり計画や工事に時間がかかり、避難先生活が長引いて生活基盤が形成したため地元への居住を断念。復興計画や防潮堤工事等における「市民合意形成」の在り方。「震災伝承施設」の決定や保存の是非。そして震災伝承を風化させずにどの様に進めるのか等々。

でも、これらは被災状況や地理的・社会的背景が違っていった阪神・淡路大震災でも課題になっていたものも多いはず。日本列島、自然災害は「宿命」です。でもその復旧・復興において、問題や課題は繰り返したくはありません。「ポーっと生きてんじゃねーよ！」とチコちゃんに叱られそうです。

今回は少し暗い内容になってしまいましたが、東京オリンピックが終わりましたら、是非「被災地の現場」へお越しいただき、映像や文字では感じられない「震災復興10年目」を体感してみてください。お待ちしております。(宮城県支部長)



## 充

## 【V】楽しいひと時 確かな感動

1. 単独の高齢身障者の日本百名山・  
日本百高山踏破

真木 太一（農学 S41）

日本百名山とは、深田久弥氏が自ら登った多くの山から「品格・歴史・個性を兼ね備え、原則として標高1500m以上の山」の選考基準で1963年に選定した百名山である。一方、あまり知られていない「日本百高山」とは、国土地理院認定の日本の山一覽（高さ順）の百名（国土地理院発行の日本の山岳標高一覽、1位：富士山3776m～100位：新蛇抜山2667m）である。

著者は、2016年9月に日本百名山、2018年9月に日本百高山を踏破し、同年10月に日本百名山を完全踏破した。併せて真木の百名山（真木太一・みどり著『自然の風・風の文化』、技報堂出版、2014年）も同時に踏破した。

著者は高校2年の時に西日本一の石鎚山（1982m、百名山）に初めて登り、登山の苦しさや登頂後の満足・爽快感を味わい、途中の景色、地形（200mの絶壁）と植生（高山植物、凝った形の巨樹）、気象（気温・風速・雲）の変化を強烈に味わい、新鮮味を感じて、山の虜と化す契機となった。1963年農工大の2年時に早々と最高峰の富士山に登った。1968年農林省・農業技術研究所に就職してからも時々穂高岳・槍ヶ岳等々の高山に登ったが、5年程の間に4回、研究・仕事（実験観測・国内外出張）・病気（医療機関側の問題で盲腸・腸閉塞・腹膜炎手術後の臨死体験、心臓手術で身障者指定、前立腺切除手術）等々で登山できない期間があった。それでも、少しずつ山に登ってはいた。逆に言えば、例えば九大教授で日本学術会議会員（農学委員長等各種委員長）の超繁忙期にも偶には登っていた。

集中して登ったのは、2013年の2回目の開腹手術（腹内癒着）後および退職後の70才の大台（2014年）に達してからであり、最近5年間で250山に登り約8割に相当する。この結果が前述の3種の百名

踏破である。具体的には、3種の登山数の合計は重複を含むため300山ではなく200山程度であるが、その他の山にも登っているため、軽く300山は越えている。目的は地形・地質・気象等々の異なる自然に親しみ、高山植物を観賞し、気象の研究者として気温の高低、風向・風速や霧・雲の地形に因る激変などを体感する事に苦難と喜びを感じるとともに、ピークハンターとして一つずつ踏破数が増えて行く事にも喜びを感じていた。付け加えると、百名山・百高山を意識して目指すようになったのは、登山レベルは違うが70、75、80才でも登頂したエベレスト登山家（心臓病持ち）の三浦雄一郎氏に刺激され、勇気付けられたかと思っている。

なお、巻機山の奥地の牛ヶ岳に農工大生の遭難碑がひっそりと置かれているのを見た。ご冥福を祈るとともに、紙面を借りて、ここに紹介しておきたい。

最近、愛媛新聞、茨城新聞に高齢・病気・単独での百名踏破についてインタビュー記事が出た。振り返ると、南極観測越冬隊員（11次、1969～1971）の経験や臨死体験後から相当経って、紫綬褒章や瑞宝中綬章を受け、農業工学会長等3学会長を歴任した後、ここに登山の目的を果たした事で概ね満足している。さて、2019年6月に『75歳・心臓身障者の日本百名山・百高山単独行』（海風社）の本を出版し、10月に日本百名山・百高山を単独行で完全踏破した。



劔御前で百高山を踏破した後に小屋前にて  
（2018年9月）

## 2. 能楽三昧

田中 賢一 (工化院 S45)

静岡の同窓会は、一般公演と懇親会が定番の催しになります。私も何十年も昔に「温暖化」について報告しました。同窓会事務局はしっかりしており、私など出る幕はありませんが副会長になっているのは、工学部が少ないためで、名前だけの役員になっています。農工通信の記事を頼まれた時、趣味についてならということ引き受けました。

能楽は素謡すうたいをもう50年ほど続けています。仕舞はついでにやっていますが、年功といたしましうか、仕舞まで教える羽目になりました。

素謡とは、謡のみで一曲を謡う形式、仕舞とは、謡を伴奏に型の見せ所を舞う形式です。能楽の習い事はほかに笛こつづみ、小鼓おおつづみ、大鼓、太鼓、さらに狂言があります。これらはすべて独立した家元がいますので稽古は各々の人に習います。

能楽の起源は、6世紀ころ中国より雅楽と一緒に入った散楽(雑技)がもとです。古来の田祭りを取り入れ鎌倉時代には、寺社に奉納する「翁」という曲は完成していました。さらに種々の芸能が交じり合い室町時代に完成したのが「猿楽」です。猿楽が「能楽」と呼ばれるようになったのは、明治中ごろです。能楽の基本理念は神の恵み、仏の慈悲、それと五穀豊穡です。

正月や特別の時に能楽堂へ行くと、まず「翁」が、次に能が3番ぐらい舞われます。正式には5番、今は2～3番が一般的です。私も能楽堂へは毎年数回行きますが、正月は師匠がでない限り行きません。

私は静岡観世会、静岡県能楽協会、静岡市能楽



中央のキャラクターが「今川さん」 筆者は写真中央奥

連盟の仕事をしています。各々発表会、県との共催、市の催しの参加と立場は多様です。平成年間、会員の減少傾向が激しく三分の一になり、会の運営も大変になりました。これは他の伝統芸能の共通した課題です。こんな訳で能楽の普及が当面の課題ですが、県の共催事業を利用して、いま取り組んでいることを述べて終わりにします。我々の大会や市のイベントのために、一般公募で人を集め、仕舞を舞ってもらう催しです。静岡市の地元キャラの「今川さん」も出演してもらいました。今年86歳から5歳児まで17人参加がありました。今年は今川義元生誕500年祭りを市が行いこれに参加しました。5歳児から大学生まで各々舞ってもらい、「今川さん」とともに全員で舞ったのが、この写真です。新聞も取り上げてくれました。市の文化祭では、同様にお年寄りの方も出演し、楽しんでもらいました。また、浜松や富士の愛好者にも出演いただき、舞囃子(4つの楽器と謡を伴奏に舞う形式)、太鼓連弾等、総出演者100人という、見て楽しい能楽の会にすることが出来ました。またこの会場のホワイエには能面の展示や10月の三保新能たきぎのうの宣伝展示も行い、少しばかり活況を得たように思います。



## 3. 「信友」と八洲秀章の生地をたずねて

長谷川 周一 (農工 S46)



もう1年も前のことなので、この発端ははっきり覚えていないけれど同期の宇野沢君に誘われて、同窓会元理事長の鈴木創三名誉教授の御尊父



「<sup>やしまひであき</sup>八洲秀章」の生地である羊蹄山麓を巡ってみることにしました。

宇野沢君と私は1971年に農業生産工学科を卒業しました。飛行機利用が一般化していない時代であり、2人とも上野駅から東北本線に乗り、青函連絡船で海峡を渡り北海道にやってきました。彼は北海道を第2の故郷にして半世紀近く働き、今年ようやく自由の身になりました。一方、私は一度道外に出たものの2001年に再上陸し、2011年に退職してからは積丹町の海辺の仙居で小さな畑を楽しみながら札幌との二重生活を楽しんでいます。

羊蹄山は約2,000mの独立峰の活火山で山裾にかけて馬鈴薯、メロン、人参等が大々的に栽培されている北海道有数の畑作地帯となっています。ここは1890年代頃から開拓が始まり、八洲秀章は開拓農家に生まれています。現在は大型農業機械が走りまわっていますが、当時は人力と馬が主体で火山灰土ですからリン酸欠乏もあったでしょう。また、冬の寒さも開拓農家の暮らしにとっては大変なことだったに違いありません。

八洲秀章は「さくら貝の歌」「あざみの歌」「山のけむり」「マリモの唄」などの作曲家です。これらの歌で私は青春を思い出します。ご存じない方はゆったりとしたメロディーをどうぞお聴き下さい。八洲秀章の生地には写真のように小さな碑が立っていました。林に隠れて広大な畑は見渡せませんが、常に雲を頂く羊蹄山が写っています。一方、広大な羊蹄山自然公園には八洲秀章音楽碑があり、タクトを振るレリーフと「あざみの歌」の楽譜がありました。山麓の一部には溶岩の間を流れ出た雪解け水の噴き出し口があり、温泉も点在して冬期以外は自然を楽しめる観光地にもなっています。

気持ちの良い山麓をドライブした後はニセコ町を通り、岩内町ですき焼きの食材を買って積丹の仙居に行き、徒歩10分の温泉でゆっくりしました。温泉は積丹町が目玉ですが、私が住んでいる集落は限界集落で、食堂やスーパーマーケットはありません。仙居に戻ってすき焼きをつまみながら酒を飲み、古いカラオケを楽しみました。

現役の頃は社会との結びつきが密接な生活をしますが、退職してからは同窓生の皆さんはどのような生活を楽しんでいますか。この原稿を書いている7月はハスカップとニンニクの収穫期です。

また畑にはダイズ、アズキ、馬鈴薯、トマト、ソバなどが育っています。さすがに朝から夕方まで畑に出て作業をすると体が痛くなる年齢になりました。しかし、健康で友達がいて、やりたいことがある、これが高齢者にとっては最高の生き方だと実感しています。半世紀以上も付き合っている頼りになる友を表す「信友」を表題に入れました。

## 4. 最近、感動したこと

西村 寿（農工 S50）

あまり変化がないこの頃ですが、ひさびさに感動しました。農業土木専修の先輩である田久保晃様（農工 S45）が『水田と前方後円墳—巨大前方後円墳はなぜ突然現れまた消えていったのか』という著作を農文協から発刊されたからです。この本は、氏がコンサルタント会社退職後も調査研究を続け、おおよそ10年の歳月を掛けてその成果を本にされたものです。もうすでに、読まれた方もあるかもしれませんが、その概要を私なりの解釈で紹介します。

・単身赴任中の休日を利用して奈良県の前方後円墳「崇神天皇陵」を見学された際、墳丘の周濠は農業用のため池でないかという疑問又は発見をする。

・奈良県南東部、大阪府南部の前方後円墳をしらみつぶしに回っても、周濠の水は上流の流域から水を呼び込み一旦ためて、下流の水田に水路を通じて灌漑用水として利用されていることに気づく。

・全国にある多くの前方後円墳を見て回るが、前方後円墳の設置された場所と時代に共通することがあることに気づく。そして、氏の農業土木技術者としての見識と興味は、前方のスカートの部分と後方の円墳（石室）部の形状に着目し、周濠部分で掘った土を前方の方墳部斜路（運搬道路とするため）を使って土を盛り、高さ40mにも達する墳丘に仕上げたのでないかと推論する。

・氏の興味は、3世紀頃まで比較的小規模な盛り土や地形を活用した墳丘が、当時の人口から想定しても到底動員無理な規模であるのに、巨大古墳はどのようにしてあれほど急速に全国に広まっていったのか。

・さらに氏は、ヤマト（と呼ぶ）が帰化人の今の技術に劣らない高い土木技術を背景に農業用水の供給と開田を奨励（独占）し、同時に権力の象徴として巨大前方後円墳を各地に造成し大和朝廷として国をつくり上げていったのでないかと想定し各種の調査と資料から結論づけていく。（人々は強要された訳でなく自ら前方後円墳づくりに従事し同時に自分たちの水田を増やしていったという）

・そして、ではなぜ、古墳時代（6世紀頃）になって急に前方後円墳は姿を消してしまったのかを推論し、古事記及び日本書紀、仏教の伝来も交えて日本の姿が完成していくまで極めて興味深い理論を実証していくのである。

私は、この本を心を震わせて一気に読ませていただいた。そして、私も確かめたくて、100kmの道のりを車で、日本最大という仁徳天皇陵に早速出かけた。「大きい。ため池だ」。日本の水田は、アジアモンスーンという水稻にマッチした気候を生かして長い時間をかけて形作られてきたと理解していたが、もっとダイナミックに、一気に広がったというのである。

それにしても、考古学者でも、歴史学者でもない農業土木技術者である田久保氏が農業土木技術者の視点での労作は圧巻である。前方後円墳そのもの及び日本文化、風土の原点をなす水田・稲作の成立過程の研究に一石を投じることになるのは間違いない。司馬遼太郎さんや梅原猛さんをご存命なら何と論評されるだろうか。偉大な先輩として田久保さんを心から尊敬し誇りに思わせていただいている。（京都府支部長）

## 5. 今日からはセカンドライフ1年生

上坂 修一（林産 S54）

今年5月に定年退職しました。約40年間の勤務先の大阪と自然の豊かな「六甲山」の麓の我が家（神戸市北区）の間を2時間かかって通勤しました。一転、ストレスフリーとなったセカンドライフの様子をご紹介します。

### 1) 早朝散歩

毎朝5時ごろ起きてすぐに散歩に出かけます。朝の風の心地よさで目が覚めます。少し歩くと樹木の多い散歩ルートがいくつかありその日の気分

で散歩コース決定。植物を眺めたり野鳥の声をきいてその姿を探したり。いつもの場所でたたく野良猫に挨拶も。梅雨に入ってからキノコも数々発生。最近神戸シルバーカレッジで習った川柳も散歩しながら創作。

### 2) 神戸シルバーカレッジ

4月から神戸シルバーカレッジ「生活環境」コースに入学。約80人のクラスメートが出来ました。身近なリサイクルなどの取り組みから、地球温暖化問題までかなり専門的な内容の講義もあり新しい情報、知識に接することで錆びついた脳細胞が少しは活性化したのではと思います。専門の授業以外に他のコース「健康福祉・国際交流・総合芸術（美術工芸・音楽文化・園芸・食文化）」と一緒に共通講義もあります。内容はボランティア活動に関するものが多く、先日は盲導犬の話の聞きました。

「生活環境」コース講師陣の中に、農工大のOBが含まれていたのも入学のきっかけにもなりました。また専属のスタッフの旦那さんが農工大の出身とわかり7月6日の兵庫県支部同窓会で会うことが出来ました。娘さんも農工大に在学中。また同窓会では神戸シルバーカレッジを卒業した先輩もいることがわかりました。卒業までの3年間でまだまだ農工大のOBとの出会いがありそうです。

### 3) 同窓会

3年前から兵庫県支部の支部長をさせていただいておりますが、実質的な運営は優秀なスタッフ任せでした。退職して自由な時間が増えたので今後出来るだけ農工大OBの方々との交流を増やしていくことに積極的に取り組みたいと考えます。

### 4) その他

いろいろな料理にチャレンジして少しずつレシピを増やしています。出来るだけゴミを出さない





ことも心掛けて料理に取り組んでいます。後片付けも工夫中。(料理) 小学校の夏祭りボランティアや町内清掃活動に参加するなど地域活動も経験して道路の空き缶などのポイ捨てが気になり時々散歩しながらゴミ拾い。(地域ボランティア)

最後に神戸シルバーカレッジのモットーである「再び学んで他のために」を念頭に農工大のOBとの交流を通じて同窓会を盛り上げていきたいと考えております。

## 6. 『猟師の肉は腐らない』を読みながら

須川 均 (林学 S58)

物語は東京渋谷の小さな酒場から始まり、福島県東白川郡矢祭町の八溝山中に建つ20坪の茅葺き屋根の小屋を中心に展開する。主人公は小屋にひとりで悠々と暮らす「義っちゃんこと、猪狩義政」と「俺」。著者は食文化論や発酵学、醸造学を専門とする小泉武夫氏である。「食べ物の本質は全て生き物に宿る」という生命観を持つ。



「俺」が訪ねた八溝山中の4日間、「義っちゃん」の暮らしが溢れ出る。茅葺きの小屋に囲炉裏と狐皮座布団、風呂は滝壺となればイメージは浮かぶ。が、猪肉の燻製、岩魚の甘露煮、イナゴの佃煮、蝉の串焼き、ドジョウの蒲焼き、蜂飯、赤蝮の味噌汁、兎汁、赤ぶどう酒の山女漬け、さらに川魚の水音焼き、八溝猟師伝来・兎の灰燻し、と続くと想像するには時間を要す。物語は「俺」が山を下りる日に巡る八溝山系の木々や薬草へと広がっていく。

この本は5年前に何気なく購入したもので、あらためて今、読み返しているところです。

現在私は狩猟者に囲まれて仕事をしています。そして毎日が刺激的です。「捕れた、捕れない」お茶飲み話から狩猟事故の生々しい顛末、有害駆除問題や野生鳥獣管理まで。最近では捕獲の担い手確保と豚コレラ対策が話題の中心です。時にマスクミからの取材依頼があったり。現地に出向くこともしばしばです。

狩猟をしない私が言うのも何ですが、狩猟は沢山の魅力が詰まっています。それはなかなか止まらない猟談義を聴いているとわかります。それに、皆大いに趣味人です。「義っちゃん」同様、あの人達を作る猪肉の燻製や鹿肉のそばろが旨いんです。熊爪のストラップはちょっとおしゃれで、イヤリングも欲しいという女性があとを絶ちません。仕事仲間の退職記念に手作りナイフを贈り続けている人もいます。ある人は温泉を山中2km先から自宅まで自力で引いてきて、毎日が湯治です。私はそんな暮らしっぷりに惹かれて、時々お裾分けをねだってます。

この本を読みながらふと、山に入る機会が多かった大学在学中に思いを馳せてみました。

とにかく闇雲に山へ入っていました。木々や動物の様子を観ることが面白くて、そこだけに心傾けていました。卒業間近になったら生意気にも、そこから社会を見ようとも考えました。

あれから40年という歳月を経た今も相変わらず山を歩いています。でも今は山と暮らしてる人と話すことの方が面白くなってきました。還暦過ぎて、また生意気なことを言わせてもらえば、今はひとを通して自然の様子を見ているような気がします。

最後に蛇足ですが、親しくしてもらっている狩猟者の人達は皆、酒を飲まないんですよね。そこがちょっとね・・・。

# 輪

## 【VI】 広がる同窓生の“和”と“輪”

### 1. 東京農工大学 準硬式野球部 創部63年祝賀会

宮城 清 (製糸 S33)  
(MOT H19)



2018年11月5日、東京農工大学準硬式野球部OB・OG会総会において、50周年記念館および農学部グラウンドで、創部63年祝賀会を行いました。同時に宮城 清OB・OG会会長から蜷木理名誉教授へ引き継ぎを行いました。

本野球部は、私が繊維学部製糸学科（現在の工学部）に入学した時、野球大好きな仲間に声を掛けて、東都大学準硬式野球リーグ第4部に加盟しました。

本学事務局職員の植田様の後を受けて、23年間、監督を務めました。若き学生諸君のはち切れんばかりのエネルギーは忘れることができません。学生諸君はチームのモットーである文武両道の精神で野球はもちろん、勉学、研究に真摯に励みました。

東京農工大学同窓会会長の故久保田富一郎初代準硬式野球部OB・OG会会長は、第二次大戦の緊迫した時代に宇都宮高等農林（現在の宇都宮大学）との試合で投手として勝利し、戦地へ出征しました。

計り知れない決意を改めて、敬意を捧げます。  
天皇陛下のご退位に触れることは誠に恐れ多いことですが、私は上皇陛下と同年齢でござ

います。貼付写真の背番号30は東都大学準硬式野球リーグの監督番号です。歴代の野球部部長は行方文吾 農学部教授、伏谷賢美 農学部教授、蜷木理 農学部教授で、現在の野球部部長は吉田誠 農学部教授であります。本野球部は何時でも暖かく迎えてくれる心の故郷であります。幸せです。心より感謝します。創部63年祝賀会は「とわに、輝け、東京農工大学準硬式野球部」一同揃って声高らかに誓いました。



### 2. 新しい年を迎えて

馬場 信行 (林学 S35)

新年おめでとうございます。

令和になって2年目、新しい年が始まりますと同時に、東京オリンピック・パラリンピックイヤーの幕開けです。私たちの世代は56年前の1964年10月に開催された東京オリンピック（第18回夏季大会）に熱狂したものです。あの頃の熱狂した雰囲気は今でも懐かしく思い出します。ショランダー、チャスラフスカ、ヘーシンク、東洋の魔女、三宅や円谷・アベベが甲州街道を走り抜けたマラソンにも興奮したものでした。今年の東京も熱く燃えることでしょう。同時に酷暑でのこの大会に参加する選手や応援に駆け付けた諸外国の方々のことも心配です。

自己紹介が遅れましたが、私は60年前の昭和35年（1960年）林学科を出ました。今でいう「地域生態システム学科」です。今年で84歳になります



ので、どんな会合に出ても最年長で、乾杯の音頭とか締めの挨拶をさせられます。

荷物を背負って歩くのが好きなので、北は北海道の利尻島・利尻岳から、南は屋久島の宮之浦岳迄歩きましたが、一番印象に残っているのは北アルプスの剣岳の感触です。剣岳では雪渓の大崩落に巻き込まれたこともありました。その事故で脳の一部が欠落し、未だにある後遺症に悩んでいます。もちろん、東京生まれなので東京の山、特にミシュラン三ツ星の高尾山が好きです。現在も毎月1回登っています。もう300回は越えていると思います。山を下りて、その足で新宿の居酒屋での乾杯、ビールは最高です。高尾山は何時でも誰でも参加OKですが、最後の乾杯への参加が条件です。

話は変わりますが、今わたくしは東京都支部の支部長をしておりますので、東京都支部設立の経緯をお話しします。昭和も終わろうとする頃、同窓生有志の話題の一つに都内在住の同窓生が9,500名を超えるため、同窓生が任意に集まって談笑する場があってもよいのではと、農工両学部の同窓生有志によって月例会「けやきクラブ」が平成元年に発足したのが始まりでした。集いの場として同窓生の宮内昭さん（農化S29）が代表取締役をされていた新宿中村屋4階の「ラコンテ」を、毎月第三火曜日に提供していただきました。その後さまざまな活動を通じて平成13年に東京都支部として発足した次第です。

東京都支部総会は毎年6月に開催していますが、これとは別に東京都支部の活動として、毎月第三火曜日の18:00～20:00新宿ビヤホール「ライオン」で、「けやきクラブ」として任意の人が集まっています。原則として参加者は東京都支部会員ですが、他県の方やお連れの方も参加できます。当日ふらりといらしても結構です。入り口で「けやきクラブ」と言ってくだされれば、案内してもらえます。

皆様にお会いできればと思っております。

お待ちしております。

### 3. 「なでしこ会・駒場会」活動報告

佐藤 政俊（林学 S42）

令和に入り最初の「なでしこ会・駒場会」（駒場寮ダンス同好会OB&OG会）が開催された。

令和元年5月18日（土）、場所は東京農工大学50周年記念ホールである。有効名簿登録者84人中女性10人、男性7人の出席者が3時間余りを今昔の話に花を咲かせた。実はこの集まりがいつから続いているのか、定かに分かる人は今のところ見つからないが、たぶん昭和45～50年の間に発足したのだというのが定説である。それ以降毎年開かれているというのだから驚く。小生が幹事役の一人になってからすでに15年が経過している。

今回の集いで、同時代に駒場寮生だった淵野雄二郎氏（農学院S46）より「農工通信」に寄稿したらどうかというご助言をいただき、昔の情報・記憶を練りながら纏めてみることとなった。

話は小生が駒場寮に生息していた昭和40年の頃に立ち戻る。

日曜日の夕方6時ころになるといつもの薄汚れたバンカラ姿から風呂上がりのすっきりしたワイシャツ、折り目のついたズボン、背広の男達がいそいそと寮を出てゆく姿を見かけていた。聞けばその先に「府中幼稚園」があり、その先生方とダンスの練習をしに行くのだと言う。幼稚園には鳥取、長野など地方から寮住まいで仕事をしながら、教諭の資格を得ることを目指している20才前後のうら若き乙女たちが多くいた。幼稚園側は広い遊技場を開放してくれて、格好の練習場となり駒場寮生にとっても楽しみの一つとなっていたと思う。これが昭和30年以前より継続されてきた「駒場寮ダンス同好会」の発展した姿だったのだと思う。

今も幹事の一人であり、競技ダンスにご活躍の内田節也先輩（獣医S34）の働きかけだったのかとも聞く。小生も3年生の初めころ同部屋の磯村正先輩（獣医S40）に誘われて参加していた。当時は女性側が10～15人、男性側が15～20人程度だったかと思う。

卒業までの間に府中幼稚園の先生方とはダンスだけでなく、ハイキングなどの行事も幾度か実現するなど楽しい思い出を作ることができて感謝している。

昭和45年ころ、当時、幼稚園教諭であった藤原美和子先生と社会人となっていた山本賢氏（農工S43、故人）が偶然にも、駅のホーム越しで出会うことになる。それが本会の立上げにつながり、まもなく第一回目が開催され、そこから延々と続

き今回に至ることになった。

開催場所は平成18年以降、農工大学50周年記念ホールに落ち着いている。

現在の会の運営は以下の幹事（敬称略）のもとで行われている。

影山露子（旧姓亀山）、小林美和子（藤原）、谷川正美（澤）、中沢俊恵（山形）、増井了子（平賀）、内田節也（獣医S34）、田中宏征（農化S40）、平野義晴（電気S47）、淵野雄二郎（農学院S46）、佐藤政俊（林学S42）。

府中幼稚園は昭和60年に閉園となったのでダンス練習はそれを契機に中断されているが、「なでしこ会・駒場会」という活動が継続していることは、それぞれの人生において意義のある集いだったのだとしみじみ思うものである。本文をお読みになっていらっしゃる方で幹事の名前にご記憶がおりの方、参加ご希望の方は是非小生までご一報いただきたいと希望するものである。

「なでしこ会・駒場会」幹事



## 4. 資格をふり返って

鈴木 輝征（旧姓 藤倉）（林学 S42）

卒業後、千葉県庁に採用となり、県での業務と県退職後の団体業務で約40年間を過ごさせていただいた。業務内容は林務行政と緑化推進であり、林道、造林・育種、森林公園の整備、開発規制など、多岐にわたった。仕事を担うには、当面担当する業務、今後必要になる業務について勉強することとなり、その勉強の方法の一つに資格取得があった。

最初に取得した資格は「測量士」、次に取得したものは1級土木施工管理技士で、これを取得した旨を農工大の恩師に話すと「正式の土方になったか」と言われ、この資格に対する当時の評価の一

面を知らされた。29歳の時に国の林業普及制度上の資格である林業専門技術員の資格を取るよう上司から突然に申し渡された。論文審査が第1次の関門であり、ともかくテーマを決め論文をまとめた。この拙速で出来の悪い論文をチェックし、ともかく提出できるレベルにまで指導して下さったのが相場芳憲先生（現・農工大名誉教授）である。長くご無沙汰しているが感謝の念は忘れておらず、また、「『なぜだ?』と思う気持ちを持ち続ける」との言葉は貴重な教えになっている。

その後、40代前半で技術士資格を目指して受験したが、まったく歯が立たなかった。この惨敗以降、資格とは遠ざかった。

それが県職の定年目前の59歳の時に、卒業試験を自身に課すような気持ちで、半年程度の準備の上、再度、技術士試験を受験した。幸運にも第一次筆記、第二次面接と合格し技術士の資格を得ることとなった。平成15年度の末の事である。これ以降、林業技士、樹木医、被災宅地危険度判定士の資格を取得した。

これらの資格のうち後期高齢者となった現在も農工大や地域との繋がりに役立っているものは技術士と樹木医である。技術士関係では平成28年12月に「東京農工大学技術士会」が発足し、同窓会の中の一つの組織となり、年1回であるが相当高度な技術士業務の発表会と懇親会が行われ参加が楽しみになっている。

樹木医関係は私の地元の千葉県で巨樹古木の案内、桜観察会の講師、小学校の百年桜（ソメイヨシノ）の樹勢回復などに取り組んでいる。特に百年桜の樹勢回復はほぼ1年にわたって仲間とともに準備し、いよいよ今年度が実施の年となる。桜



千葉県市原市立市西小学校の百年桜



については何万回語るより、一本のサクラの樹勢回復に成功して次代に伝えることこそ尊い。仲間と手を組み成功させなければならない。

振り返れば50年以上前の農工大林学科の受験は余裕をもって臨んだのではなく、かろうじて合格したとの思いがある。この能力の不足感こそが、資格を得ようとする根本の動機となっており、桜の保全を通じ、自己研鑽の意味を確認する機会としたい。

## 5. 卒業50年後のクラスなかま

佐藤 俊彦 (織工 S43)

繊維工学科昭和43年に卒業して以来、50年目のクラス会を平成30年10月29日に国家公務員共済江の島ニュー向洋で開催した。前回クラス会から20数年来の久しぶりの再会、卒業以来の初参加の人など14人出席。皆さん古希を過ぎて誰だか分からない好好爺になっていた。それでも50年前の学生の頃の面影や性格は変わらず懐かしい…。

ところで、このクラス会を一番楽しみにしていたのは瀬戸山幸一君だった。彼は卒業研究のパートナーとして小生を指名し二人三脚で実験するはずが、空手の部活動には非常に熱心で（3段取得）、研究室にはいつも午後8時過ぎてから元気な姿で現れ、実験すると思いきや麻雀や遊びに興じ、楽しながら卒論を仕上げる事ができたのは真面目に取り組む協力者のお蔭と思う。しかし、彼は農林省蚕糸試験所に就職した後に森林総合研究所へ転職、木材加工学の第一人者として研究人生を全うした。2018年4月に農工大科学博物館に招かれ「木材を気体で変身—環境に優しい木材処理方法—」の題目で講演をされた。その折にクラスなかまが出席し、講演会後の飲み会で久しぶりのクラス会を開催することになった。

小生が幹事役を担い、10月開催のクラス会の連絡をしたところ彼から一番最初に出席の返信が届いた。ところが9月29日土曜日に「入院するからクラス会は出席できない」と、突然の電話があり不安に思う束の間、翌翌月曜日に奥様からご逝去の連絡があり大変ビックリした。クラス会当日の宴会では奥様から寄贈された牛久ワインで献杯し、学友を偲びご冥福をお祈りした。



大学1年の農工祭の模擬店で



卒業50年後のクラス会記念撮影

以下、卒業50年後のクラスなかまの元気に生きている証の報告である。

青木：京都工織大で学位取得、大阪大学客員教授で研究指導。

阿部：会社技術顧問の仕事と鎌倉の地で写経、鎌倉彫などの文化生活を嗜む。

牛山：病を抱えて仕事やボーイスカウトのボランティアに励む。

大平：青森県下北のむつ卸市場の社長後、相談役で活躍中。

栗田：夫婦円満の秘訣は積極的に家事協力。

鈴木彰：毎月、沖縄石垣島の別荘でスキューバダイビングとボランティア活動。

鈴木泰彦：顧問弁理士の仕事、空手（3段）、酒は現役続行中。

旧姓中村雪枝：70才で特許庁を卒業し、専業主婦と趣味の両立。

松本：腰を痛めながら散歩、卓球に夢中。

森平：縫製事業のビジネスで東南諸国や中国を飛び回る。

山田：在宅の仕事の続けながらカメラやテニスを楽しむ。

山中：趣味の隠居生活を満喫中。

和田：小学生少年サッカーチームの指導者に生きがい。

佐藤俊彦：水耕栽培で「うまみ野菜」を開発中。全員一致？によりクラス会終生幹事を拝命。

禿：欠席しますが元気です。皆さんによろしく。

旧姓小林祥子：皆さんによろしく。軽井沢の別荘で一人暮らし。

滝澤：皆さんに会いたいが仕事休めません。東青梅の自宅で蕎麦屋「雲水」営業中。

## 6. 記念誌『色の黒い奴』と畜産学研究室OB会の活動

青木 隆夫（農学 S51）

わが国の農業総産出額は9.3兆円、そのうち生乳、牛、豚、鶏など畜産物は35%を占め、国民の健康長寿に貢献している。本学に畜産学研究室が創設されたのは、昭和29年のことである。農学科に信州大学から川端吉成助教授を招いた。その後、教授陣は森田琢磨、野附巖、菅野茂、鎌田壽彦、そして現在の佐藤幹へと引き継がれてゆく。畜産学研究室が送り出した同窓生は昭和30年以来350余人になる。ここでは研究室OB会が行った「記念誌刊行」と追いコンの前に主催する「講演会」についてご紹介する。

### 記念誌『色の黒い奴』

50周年記念誌の刊行は、森田先生の意を受けた、南波利昭（S46）の発案である。平成15年11月に大國魂神社で行われた祝賀会の席で「先輩たちが元気なうちに、歴史を残そう」ということになった。企画と執筆者、そして費用が何とかなれば書籍の出版はさほど難しくない。記録が後世に残ると思えば、汗をかく甲斐はある。板橋久雄（S39）、樋口康一（S42）、青木隆夫（S51）、青木康浩（S61）らが編集委員会を立ち上げた。第一部「青雲時代」に始まる執筆者を選ぶとともに、投稿も募集する。



記念誌

その一方で同窓生全員から出版費用に相当する寄付を募った。

幸いなことに、昭和42年から現在まで続く「追いコン」（畜産研卒業生送別会）にOBたちが顔を出し、連綿と交流があったため原稿依頼に苦労はなかった。発足当時を知る園芸学の松本正雄先生をはじめ、40人の方々からご執筆を戴いた。監修には鎌田、森田両先生と初代会長の香川莊一（S33）があたり、翌年7月に完成する。題名は駒場寮歌にちなみ『色の黒い奴』とした。

これが60周年記念誌『色の黒い奴2』につながる。50周年では歴史と思い出が中心であったが、ここでは最近の研究を話題の中心にすることにした。委員には、神田修平（S48）、濃畑雄四郎（S52）、佐藤幹先生、研究助手の青木充（H18）が加わった。また、下田博之先生（農場）、田谷一善先生（獣医）、平澤正先生（作物）よりご寄稿いただき41人の執筆者、136頁からなる第2号を平成25年11月、60周年記念祝賀会の席で配布することができた。

### OB会主催の講演会

祝賀会の精算が終わり、金が余った。そこで、毎年3月第1土曜日午後2時から6号館で開催される追いコンにOBをゲストに招き、少し



講演会

は学生の役に立つ業界の話題を提供したい、と申し出たところ快諾を得た。第1回目は阿部宇一郎（S40）、それ以降、安川一（S45）、南波利昭、花島大（H4）、渡邊裕（H7）らがスピーチを行っている。今年の青木康浩は、自ら研究対象とする「スマート農業」をテーマにした。聴講者は同窓生に加え現役学生も数多く、年を追うごとに増えている。

なお、会の蓄えもそろそろ尽きてきたので、参加するOBからは、追いコン費用プラス1000円を頂くことにしている。連絡が行き届かないので、本誌で気づいた方はぜひ顔を出して頂きたい。米寿を過ぎた野附先生ら歴代の先生方も参加しており、温故知新の場になることと思っている。

（本文中OB敬称略）



## 7. 運命を変えた同窓会

柳田 正（電情院 H10）

私の住む都城市は本格焼酎の生産量日本一。この町で家族経営ながらも最も古い歴史を有する柳田酒造の次男として私は生まれました。都会でエンジニアになるのを夢見て、宮崎から上京し東京農工大学を受験しました。大学院修了後には富士ゼロックス株式会社に入社。希望した研究開発部門に配属され憧れのエンジニアとしての人生がスタートしました。

入社して5年経ち順風満帆の日々を送っていたある日、父が難病であるパーキンソン病を発症したという衝撃の報告を受けました。好きで選んだこの仕事を辞めることに後ろ髪を引かれる思いもありましたが、百年以上続いた家業を絶やすわけにはいかない。使命感から家業を継ぐ決断をしました。当時交際していた同じ農工大中川研究室の後輩が、一緒に宮崎についてきてくれたのが決断の後押しにもなりました。縁もゆかりのない地に嫁いでくれた妻に今でも感謝しております。

家業を継いでからは焼酎造りにのめり込み、ひたすら焼酎造りに没頭しました。農工大時代に培った探求心から蒸留器の改造を重ね、これまでに無かったいろんなタイプの焼酎も造りました。そしてたどり着いたのが麦焼酎の原料「ミヤザキハダカ麦」でした。この麦は古くから宮崎に存在していた在来種の裸麦。まさに宮崎の麦を代表する存在でした。ところが、麦作自体が衰退し昭和の終わりとともに姿を消しておりました。この麦を復活させ宮崎の麦焼酎のルーツを辿りたい、由来も生産もオール宮崎産の焼酎を飲んでみたい。そう強く思うようになりました。

幸運にも県の農業試験場には種子が保存されているという情報を得ました。すぐに県に問い合わせ何度か入手を試みましたが結局この種を頂くことはできませんでした。

家業を継いで間もなく農工大宮崎県支部から同窓会のお誘いがありました。20代かつ夫婦揃っての出席は珍しいので、先輩方からはとても可愛がって貰っておりました。そのおひとりが小崎宏（農S45）先輩でした。当時先輩は現役の宮崎県庁職員で、畑作の技術者として活躍されており

ました。ひょんなことから麦の話になり、なんと若い頃ミヤザキハダカ麦の指導員をされていたとしゃつたとのこと。ここでの話をきっかけに小崎先輩が県庁の各方面に働きかけ、苦勞の末ついに幻の麦の種を私に届けてくださったのです。

あれから十年。残念ながら小崎先輩は亡くなられてしまいましたが、この日の興奮は昨日のこのように今でもはっきりと覚えております。種をいただいてから2年で商品化に辿り着いたミヤザキハダカ麦焼酎は柳田酒造の屋台骨を支えるブランドとして育ちました。毎年発売と同時に全国の特約店で予約完売が続いております。直接お礼を伝えることができませんが、小崎先輩には本当に感謝しております。この出来事をきっかけに同窓会の繋がりでも焼酎もできました。この芋焼酎は、麴米を井上新三郎（農工S54）先輩が、芋焼酎の原料芋を後輩の牧田幸司朗（生産H22）君に生産してもらっております。

後輩想いの小崎先輩はきっと天国からわたしたちを見まもってくれていることでしょう。

（柳田酒造五代目）



小崎 宏さん



ミヤザキハダカ麦圃場



ミヤザキハダカ駒

# 株式会社 八木製作所

創業：1963年(昭和38年)

所在地： **本社** (JR中央線豊田駅徒歩1分)

東京都日野市豊田4-36-16

**八王子工場** (JR中央線八王子駅バス7分徒歩3分)

東京都八王子市大和田町3-4-17

**八王子第二工場** (JR中央線八王子駅バス7分徒歩5分)

東京都八王子市大和田町1-21-12

業務内容：事務機器、光学機器、医療機器等の部品の精密加工及び  
治具の設計・製作・組立

H P : <http://www.yagiseisakujo.co.jp>

MAIL : [support@yagiseisakujo.co.jp](mailto:support@yagiseisakujo.co.jp)

**困った時も八木製作所!**

CATERING

パーティー  
ご宴会は PLAN サングリアで!!

忘年会・新年会・歓送迎会・同窓会・謝恩会など各種パーティー  
公共施設・会社でのご用命はサングリアのケータリングサービスを

お客様にふさわしい雰囲気で作りのおいしい料理と楽しいお酒と  
ご要望に合わせたスタイルでご調整いたします。

TELEPHONE

042-368-6368

HOMEPAGE

<https://santgria.jp/>

ADDRESS

東京都府中市本町1-1-7



太陽と水と空気と土からの  
イノベーションを目指す農工大発ベンチャー

企業ビジネス創生と地域創生に役立つ

株式会社 **アルマイト触媒研究所**

東京都小金井市梶野町1-2-36

代表取締役社長 亀山 秀雄

取締役(技術担当) トラン タン フォン

E-mail : [tatkame@cc.tuat.ac.jp](mailto:tatkame@cc.tuat.ac.jp)

東京農工大学工学府化学システム工学科亀山研究室の35年の研究成果であるアルマイト触媒製造技術、オゾン発生技術、オゾン水製造技術、エタノール改質技術、アンモニア水製造技術、排ガス浄化技術、脱臭技術とプログラムマネジメントを活用してお客様のニーズに応じて装置開発を行う研究開発型の会社です。



## 事務局からのお知らせ

事務局長 池谷 紀夫

東京都支部の会員は12,000人を超え、全同窓会員の1/4になります。そんな状況の中、東京都支部の活動をご存知の無い東京都支部会員の方々が多くいらっしゃると思い、東京都支部長の馬場信行さんに、東京都支部の活動と東京都支部のホームページの開設をお願いしたところ、活動に関連する寄稿文（P31掲載）とホームページ開設のお知らせ文（下記）を頂きましたので掲載いたします。

### 東京都支部アラカルト（ホームページの開設）

東京都支部長 馬場 信行

東京農工大同窓会は2018年に法人化されました。これにより、社会的に認知された法的根拠を持つ団体組織に改編され、新たな事業展開する上でも幅が広がり、同時に社会的責任を果たすこととなります。

優秀な理科系研究者・技術者を輩出するわが母校の発展は今後益々期待されていると思います。同時に同窓生12,000人余を仲間を持つ東京都支部も今後さらに飛躍をしたいと思うところであり、社会にも企業にも大学にも貢献する存在であることを深く希望します。このような環境下、伝統的な同窓会の枠を超え、従来の型とは異なる新たなOB/OGネットワークのありようはないのかを模索した結果、まずは会員への連絡や会員相互の連携等を目的として、東京都支部のホームページを立ち上げました。今後、東京農工大学同窓会東京都支部の動向、各校友の動向、そして各校友がそれぞれの情報を共有しつつ新たなネットワークなどを創生することを期待するものです。

URLは<http://tuat-reunion.tokyo/>です。是非一度、ご覧になって下さい。

#### 東京都支部の活動

体制 会長(支部長)：馬場 信行 (林学S35)      副 会 長：栗原 知 (林学S48)  
 代 議 員：畠山 晃 (林学S40)      連 絡 員：稲田真樹子 (地生H17)  
 会 計：蓮尾 純子 (林学S47)

支部総会 毎年1回6月に大学キャンパス内で開催

定例会「けやきクラブ」

毎月第三火曜日18:00～20:00 新宿ビヤホール「ライオン」で開催

#### ●お勤めの会社に同窓会がありますか？

今お勤めの会社の中に、本学同窓生による同窓会がありませんか？会社の中に同窓会を組織して、新入社員歓迎会や忘年会を開催しているケースも少なからずあるようです。これまでも数回、大学理事（副学長）や同窓会事務局長がお邪魔して懇親を深めさせていただいております。

同窓会では、今まで企業に就職されている方とのつながりが、必ずしも緊密ではなかったと考えています。卒業後も何らかのお手伝いができればと思います。

そこで、今お勤めの会社に同窓会がすでにある方や、これから組織しようとしている方、下記に連絡いただけないでしょうか。活動のご支援や在学生のリクルート支援（仲介）など、同窓会としてご協力させていただきたいと思っております。

（一社）東京農工大学同窓会事務局 事務局長 池谷紀夫

電話：042-364-3328 E-mail：info@tuat-dousoukai.jp.org



# 事務局だより



## 1. 会費納入のお願い

同窓会はみなさまからの会費で支えられています。  
本会の維持・活動のために会費納入にご協力をお願いいたします。

会費は次の通りです。

1. 終身会費 30,000 円
2. 年会費 1,500 円（年会費は年度4月～3月を1年としています。）

同封の振込票にて、上記いずれかの金額を納入してください。

◇農工通信に払込票が同封されていない方は納入済です。 ◇過去に遡って納入の必要はありません。

※ 11月中旬時点のデータに基づいておりますため、行き違いで既にご入金いただいておりますらご容赦下さい。

一般社団法人化に伴い、同窓会の会員種別が変わりました。

東京農工大学を卒業または修了した方全員が同窓会の会員「一般会員」になります。会費を納めていただくと「正会員」になります。皆様の現在の会費納入状況は、送られる会報の宛名ラベルに記載されています。例) 正会員（終身または年）、一般会員、賛助会員

保護者の方が賛助会費（30,000 円）を納入している場合は、学生本人が卒業・修了時に、正会員（終身会費）に切り替わります。改めて会費納入の必要はありません。

## 2. 住所等の変更・メールアドレスの新規登録について

農工通信は、ご登録いただいているご自宅住所にお送りしております。転居等で住所等、登録内容の変更があった場合は、同窓会事務局までご連絡願います。メールアドレスを登録いただきますと、各種連絡がスムーズに行えますので登録をお願いいたします。登録内容の更新・変更は、同窓会ホームページ「会員情報」からお手続きができます。

なお、同窓会が保有している会員の個人情報の公開については、ご本人の意向に沿って管理・運営し、個人情報保護には万全を期しております。

## 3. 名簿提供について

平成22年5月『同窓会会員名簿』発行の廃止に伴い、個人情報の提供につきましては、部会・支部・クラス会からの依頼により、従来の会員名簿に替わるサービスを行っております。

【申請書（「(様式1)同窓会会員個人情報提供依頼」）の入手方法】

- 1) 同窓会事務局へ電話・メール等で、送付依頼
- 2) 同窓会ホームページ「各種申請フォーム」からダウンロード

【申請手続き】

利用目的	申請者	申請書	必要書類
部会・支部活動	部会・支部の連絡員	(様式1)同窓会会員個人情報提供依頼	-
クラス会・OB会等の開催	同窓会員		身分証明書(運転免許証、健康保険証など)のコピー

※個人的な情報提供依頼は、ご本人の承諾を得て情報を提供します。



#### 4. 農工通信100号への寄稿をお待ちしています！

「農工通信」後期号（1月発行）の制作は同窓生によるものです。

大学時代の思い出、農工大学への激励、社会人としての経験、趣味、同窓生交流の呼びかけなど寄稿しませんか？また「農工通信」は現役学生にとって社会人との交流の場、手段にもなります。同窓会では、現役学生への支援にも力を入れています。学生に向けての寄稿も大歓迎です。

- ・文字数：1200字程度（写真1枚）
- ・メ切：令和2年6月末日
- ・送付先：「農工通信」編集委員会 email：nokotusn@tuat-dousoukai.jpn.org  
郵送：同窓会事務局

※クラス会の報告は同窓会ホームページ「クラス会便り」に掲載後99号（前期号8月発行）に掲載になります。

#### 5. 農工通信への広告掲載の募集

「農工通信」は卒業生、賛助会員、教職員向けに約4万部発行しています。

本誌への広告掲載にご興味のある方は、同窓会事務局までお気軽にお問合せ下さい。

## 編集後記

Editor's note

明けましておめでとうございます。

昨年5月に元号が平成から令和に変わって初めてのお正月を迎え、皆様健やかにお過ごしのこととお慶び申し上げます。

令和という時代は、既成の概念だけでは通用しない激しい変革の時代となるような気がしてなりません。是非とも安心して生活のできる世の中になってくれることを願っています。

さて、今期号には100歳になられた先輩からの寄稿を

はじめ43編の寄稿を頂き、様々な分野での活動や若き日々の思い出など興味尽きない内容と共に、当大学の歴史と伝統を感じながら編集作業をさせていただきました。

農工通信後期号は、学んだ年代は違っても東京農工大学という共通の学び舎で学んだ皆様が、相互に情報を発信し、交流ししつお互いの絆を強めていく場です。

これからも、いろいろな意見や提案、近況、仲間との交流を含め、幅広い分野でのご寄稿をお待ちしています。

編集委員 橋本 裕

編集委員会

深水智明（織工S38）、大亀哲郎（農工S46）

金子由実（織高院S53）、橋本 裕（林産S47）

## 農工通信 第98号（後期号）

発行日 令和2年（2020年）1月1日

発行所 一般社団法人 東京農工大学同窓会

連絡先 〒183-8538 東京都府中市晴見町3-8-1 （一社）東京農工大学同窓会事務局  
TEL 042 (364) 3328 FAX 042 (335) 3500

e-mail info@tuat-dousoukai.jpn.org URL <http://www.tuat-dousoukai.org/>

印刷所 小野高速印刷株式会社

〒870-0913 大分県大分市松原町2-1-6

お中元、お歳暮、贈り物に最適  
 部会、支部会、同窓会でも  
 ぜひご賞味下さい。

[しょうてんろく]  
**賞典禄**  
 農工大ブランド本格焼酎

本学では、農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター（FSセンター）で栽培した原料（米・芋・麦）をもとに製造した農工大ブランドの本格焼酎「賞典禄（しょうてんろく）」を販売しています。  
 「好評いただいております」「賞典禄（しょうてんろく）」「米・芋・麦の本格焼酎に加えて、麦の熟成した原酒もそり踏みとなり、ますます品ぞろえが豊富になりました。」  
 この原酒は、本格焼酎の個性そのものが凝縮されている焼酎で、一味違う深い味わいを楽しめますので是非ご賞味下さい。



原酒（麦） 米焼酎 芋焼酎 麦焼酎 長期貯蔵酒（米）

酒類販売管理者標識

販売場の名称及び所在地	東京農工大学農学部フィールドサイエンスセンター 東京都府中市幸町3-5-8
酒類販売管理者の氏名	本 林 隆
酒類販売管理研修受講年月日	平成29年8月30日
次回研修の受講期限	平成32年8月30日
研修実施団体名	社団法人 日本ボランティアチェーン協会

**賞典禄 FAX 注文票** 以下のとおり注文します。

東京農工大学 FS センター 宛 FAX : 042-367-5801

【ご注文内容】

		年	月	日
原酒 麦焼酎 (2,500 円) 43 度 720ml	本			
長期貯蔵酒 米焼酎 (1,800 円) 41 度 720ml	本			
焼酎 米・芋・麦 3 種セット (4,200 円) 25 度 720ml×3	セット			
合計注文金額				円

【ご注文者様情報】

お名前		フリガナ	
住所	〒		
電話番号		FAX 番号	
生年月日	T.S.H	年 月 日	

※年齢確認をさせていただく場合がございますのでご了承願います。

- 【ご注意】 ※1 お支払いは代金引換またはクレジットカードになります。詳しくは下記 URL をご覧下さい。  
 ただし、FAX でご注文された場合のお支払いは、代金引換のみとなりますので、ご注文者様以外への配送は致しかねます。  
 ※2 ご注文いただいた上記金額の他に、送料 (5,000 円以上は無料) 及び代金引換手数料 (代金引換額に応じた所定の金額) が必要になりますので、予めご了承願います。  
 ※3 本注文票により収集された個人情報、賞典禄の販売以外の目的には使用いたしません。

**ネットショップ：FS センター農工夢市場ネットショップ**

<http://www2.enekoshop.jp/shop/noukoudai/>

問い合わせ先

農学部附属広域都市圏フィールドサイエンス教育研究センター事務室

TEL042-367-5811